

42067

教科書文庫

4
810
41-1912
20000 18207

71  
1912

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

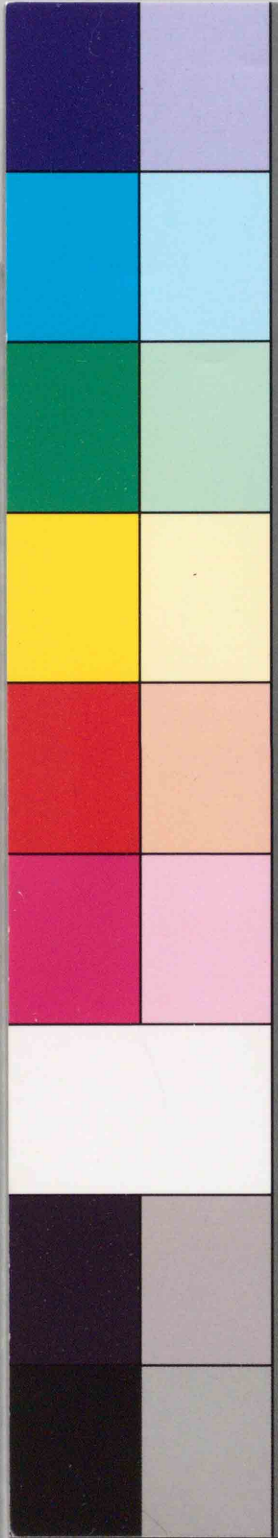
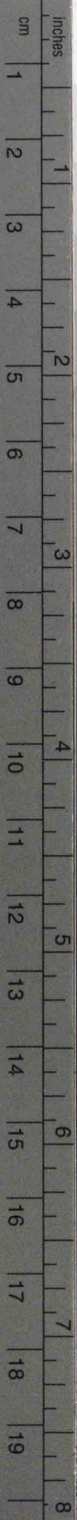


© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



375.9  
Fu7  
資料室

補訂  
新體國語教本  
藤岡作太郎編纂  
藤井乙男補訂  
二





375.9  
Fu7

文部省檢定  
大正元年十月九日  
中學國語教科用

補訂  
新體國語教本

文學博士藤岡作太郎編纂  
文學博士藤井乙男補訂



東京 開成館藏版

卷二 目次

- 一 農家の四季 一
- 二 愛國心 四
- 三 中江藤樹 七
- 四 藤樹の手紙 一三
- 五 墓詣 一五
- 六 華盛頓の住宅 一六
- 七 ワットその一 一九
- 八 ワットその二 二三

目次



九	流星	二七
一〇	學生の公德	三一
一一	約束を守れ	三三
一二	信義と堪忍	三七
一三	猿智慧	四一
一四	イソップ訓話	四三
一五	兎狩	四九
一六	大久保彦左衛門	五五
一七	織田信長と廻國僧	六〇
一八	太閤の逸話	六三

一九	くいてくはず	六七
二〇	河村瑞賢	七一
二一	紙鳶	七七
二二	需要と供給	八一
二三	石炭	八六
二四	暖室法	九〇
二五	田舎の生活	九五
二六	能代の防風林	一〇一
二七	瀬戸内海	一〇四
二八	戦友の同情	一一一



二九	肉彈	二三
三〇	薩摩あらし	二八
三一	いくさ物語	二三
三二	鋼鐵王	二六
三三	信用	二四
三四	明治天皇御製	二五



補訂 新體國語教本卷二

一 農家の四季

かすく 見え 見え 見え  
 生え 生え 生え  
 蛙 蛙 蛙  
 終り 終り 終り

たゞ廣々と淋しかりし田も、春になれば、鋤もつ男の影かすく見え、農事も漸うせはしくなれり。春過ぎ、夏來れば、苗代の稲は針を立てたるやうに生え、耕されたる田はまんくくと水を湛へて、蛙の聲やかましく、植付を促すかと聞ゆ。五月雨ふりつゞく間に田植は終り、いつしか暑さ堪

農家の四季

一



堪へ。  
涼しく  
乾き  
おのく  
水

案山子  
雀

へがたき頃になれば、郊外は一面に緑の田なり。穂末に置きたる露の玉も涼しく、夕風吹き渡る稲の波も快し。早つゞきて、土乾きひゞわれんとすれば、かしの村、この村、わが田に水を引かんと争ふ。夜の程あちらこちらに火光の赤く立ち升るは、蟲送とて害蟲を狩るなり。  
秋風音づれて、青田は漸う色づく。やがて黄金の色ゆたかになれば、案山子は弓張り、鳴子は風に鳴りて、群れくる雀を驚かす。二百十日の厄日も過ぎて、稲はふさふさとよく實のりたるを、刈りもし、干しもし、扱き

貯ふる  
收穫、獲  
瑞穂國  
栽ゑ  
かはらず  
獲る、收穫

もし、篩ひもし、俵につめて貯ふるまで、農家の忙しさは犬猫の手も借りたき程なり。辛うじて收穫のこと終れば、はや霜深く、雪も降る頃となる。  
古よりわが國は瑞穂國ともいはれ、氣候溫和、地味肥沃にして、耕作に適すれば、多く穀類を栽ゑ、多く穀類を食ひて生活したり。穀類のうち、米が第一に貴ばれて、いつもかはらず國民の常食たることは、勿論なり。養蠶の道も早くより開けて、生絲は輸出品の首位を占む。牧畜の業の振はざるは、わが國が海國にして、魚介を獲ること極めて易ければなるべし。

1098  
399  
699



稠密

人爲

天然

わが國は、地狭く、山高くして、人口最も稠密なれば、今日  
 は國民が要するだけの穀物を産せず。されど從來の農業は未だ大いに進歩せず、人爲の勞を盡さずして、天然の惠を頼む弊少からず。歐洲にては、四時雪を戴くアルプス山間の瑞西にても、なほその地の面積の一割九分を耕すと聞くに、わが國にては、内地すら僅に一割七分に過ぎずといふ。われらは十分に學理を應用して、田地を擴げ、農業を改良せざるべからず。

二 愛國心

都合

人情

頓着

たとひ。

わが親愛する少年よ。御身等は己を愛して、何事につけても己に都合よくあれしと望むならん。これを名づけて自愛心といふ、自愛心は自然の人情なり。然れども御身等は己を愛するのみにて、その外は何者にも頓着せずといふ譯にはあらざるべし。御身等の父母、兄弟、姊妹、御身等の一家、親類等、これ皆御身等のものなれば、御身等は彼等をも愛して、何事につけても彼等に都合よくあれかしと望むならん。たとひ肉親の者ならずとも、御身等の朋友、御身等と志を同じうする者には、またその愛を及し、何事につけても彼



保護<sup>○</sup>收穫<sup>○</sup>獲<sup>○</sup>

義務

等に都合よくあれかしと望むならん。故に若しまた彼等に對して暴虐不正を加へんとする者あらば、御身等は力を盡して彼等を保護するならん。然り、我等は何らん限の力を盡して、彼等を保護すること、わが身を保護するが如くなるべし。これわが義務なりと信ず。

國家 家族

少年よ。御身等の父母、兄弟、姉妹等の相集りたるものを家族といふ、家族の多く集りたるものを民族といふ、一の國家は即ち家族の大なるものなり。故に御身等は家族の一人として家族を愛するが如く、民族

幸<sup>○</sup>希<sup>○</sup>

愛國心

の一人としては、あくまで國家を愛し、心から國家の幸ならんことを希ひ、若しこれに對して暴虐不正を加へんとする者あらば、あらん限の力を盡して、國家を保護せざるべからず。この國家を愛する心を名づけて愛國心といふ。

(人民讀本)

三 中江藤樹

聖人

近江聖人と稱せらるゝ中江藤樹は、徳川氏の世の初頃の學者にして、近江國高島郡小川村の人、通稱を與右衛門といへり。幼より祖父母の許に養はれて、伊豫

慶長十三  
三月七日



大洲侯加藤泰興

夫樹欲靜而風不止、子欲養親不待、往而不可返者年也、逝而不可追者親也。  
(韓詩外傳)

孝養

悔

重んじ

の大洲侯に仕へしが、父は藤樹が十八歳の時歿して、母ひとり郷里にあり。藤樹これを慕うて已まず、樹靜かならんと欲すれども風止まず、子養はんと欲すれども親待たずといふことあり、今にして膝下に孝養



中江藤樹

せずば、とり返しがたき悔あらんとて、書を執政に上りて、職を辭せんことを請ふ。されど侯その人物を重んじて、これを許さざりしかば、遂に官を棄てて去り

修め

教ふ

飛脚

榎木は高島郡の隣郡なる滋賀郡にあり、大津へ至る途なり。

ぬ。元來孝心より出でたることなれば、侯もこれを咎めず、そのまゝにして事濟みぬ。これより藤樹は小川村にありて老母に事へ、自ら學問を修め、旁ら近隣の子弟を教ふ。郷黨親の如く親しみ、神の如く敬ひて、皆その徳に化し、相顧みて善に移れり。或時、加賀の飛脚金二百兩を預りて京へ上りしが、途に近江を過ぎて、榎木の驛に泊りぬ。見ればかの金なし。飛脚は生きたるこゝちもせず、途方にくれ居たりしに、夜更けて宿の戸を叩く者あり。晝雇ひたりし馬方にて、かの金を馬の上に忘れたりしを持ち來りし



蘇り行李

なり。飛脚は蘇りたるやうにて、喜のあまり行李より別の金十五兩を取り出して贈るに、馬方は手をだに觸れず。十兩にへらし、五兩にし、三兩にし、遂には二歩につめて、せめてこれだけを受けくれば、わが心も安からず、今宵も寐がたし。」と辭を盡して勸むれども、それを賜はる程ならば、二百兩も留め置くべし、謝禮を受くるはわが本意にあらず。去かしあまりに餘儀なくいはるれば、ふゝまで返しに來れる賃錢二百文を申し受くべし。」といふ。飛脚は感に堪へかね、そなたはいかなる人なれば、かくは清廉なるか。」と問ふに、馬

今宵  
辭  
謝禮  
餘儀なく  
堪へかね

恥ぢ入り

方恥ぢ入りて、吾は何一つ知れる者にあらず、唯わが在所の近邊に與右衛門といふ人おはして、夜毎に講釋したまふを聽きて、道といふものの片端を心得しなり。」と言ひ棄てて歸りぬ。飛脚は京に着きて、この事を人に語れるに、折節學問の爲に京にありし熊澤治郎八これを聞き、その人こそ眞の儒者なれとて、直に小川村に到りて、藤樹の門に入りぬ。治郎八はのち備前侯に仕へて功勞あり、有名なる熊澤蕃山これなり。慶安元年、藤樹四十一歳にして歿しぬ。邑人その宅を祠堂としてこれを祀り、今に至りて廢せず、名づけて

講釋  
聽、聞  
折節  
聞、聽

備前侯池田光政

慶安元年は二三〇八年



藤樹書院といへり。

藤樹が大洲の執  
政佃氏に上れる  
もの

四 藤樹の手紙

意見

罷成

はごくみ  
よすが

今度私御暇の儀言上被成被下候と奉願候  
につき種々御意見の段忝く奉存候此中も  
申上候如く一には何れも御存じの如く二三  
年以前より病氣に罷成候て次第に人なまめ  
御奉公難儀に奉存候一には故郷の母十年  
以來ひとり住を仕り罷在候私の外に別に母  
をほごくみ可申子も無御座又はよすがに頼

候へば、候はば  
うゑ死

み可存候もの能き親類も無御座候故四五年以  
前より漸く飢寒に及ぶ體に御座候間此地に  
つれづれ可申と奉存去々年御願申上げ迎  
に参り候爰も何や年罷寄り又は病者に  
御座候て里の内なる自由にあるも申事不罷  
成體に御座候其土女の儀に御座候へば故郷  
をなれ遠國に参り候事なごう急死仕候  
ても成申まじき旨申候故是非に及ばずすて  
置き罷歸り候私儀は養親共に四人迄御座候  
へども三人には幼少にてはなれ申し今母一人



候はば、候へば  
覺悟

不便

候はば

残り申候母一人子一人の事に御座候其上母存  
生の内も今八九年の體に御座候條御暇申  
請け故郷に罷歸り母存命の間は如何様のわ  
ごなりとも仕り養ひ申度奉存候母相果て候  
後めしかとれ被下候はば御奉公仕度覺悟に  
御座候此外聊か存ずる子細も無御座候斯様  
になげき申す所御聽届被成候て不便に思  
召し候はば能き様に御取りつゝろひ被成きと  
めしあやまりの無御座様に被仰上御暇被下様  
に奉頼外無他事候恐惶謹言

(原文節略)

五 墓詣

奥津城

奥津城近く一人立てば、

身よしみ渡る秋のあらし。

三年の月日夢とすぎて、

苔むしふりぬ、父の御墓。

年ごとめでて作りましし、

白菊一枝手向けまつる。

色香の清きこれの花袋、

學べとのりしむるし志のぶ。(小金井君子)

しのぶ



### 六 華盛頓の住宅

華盛頓は米國初代の大統領、マウントベルンは同國バージニア州にあり。

大統領

源泉地

わ  
る

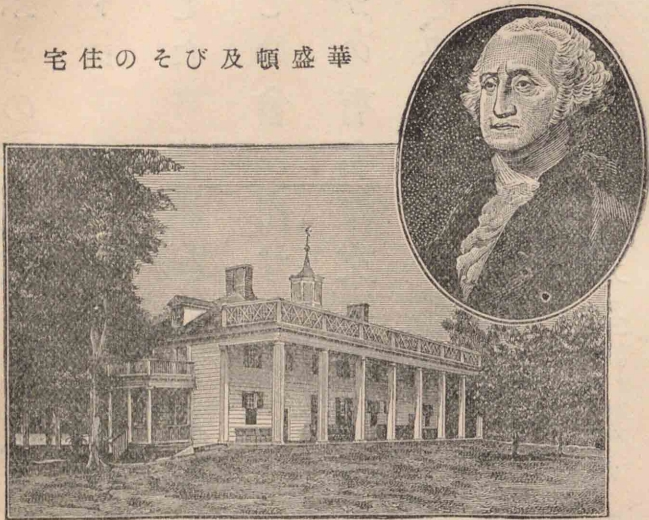
マウントベルンといふ處は、華盛頓の住んで居つた屋敷がある。獨立戦争の時召し出されるまでは、こゝに田圃を耕して居つたのであるが、大統領を罷めてから、再びこゝを退いて田圃を耕し、千七百九十九年にこの屋敷で死なれたので、こゝははその墓もある。それが爲に、この地が愛國心の源泉地として尊ばれてゐる。

然るに千八百五十五年になつて、當時の戸主は終に

(三)

舊跡  
行かう。  
義金  
同情

華盛頓及彼の住宅



この屋敷を持ちきれなくなり、已むを得ずそれを賣らうとした。その時南カロリナ州のカンニングラム嬢といふのが、婦人の身で深くこれを遺憾と思ひ、是非ともこの舊跡を永久に保存して行かうといふので、義金四十萬圓の募集を企てた。これが非常に世間の同情を得て、三年目にマウントベルン婦人會とい



講演

陸續

文豪

維持費

ふものが組織されて、廣く寄附を募ることとなり、エドワード・ド・エベレットといふ人の如きは、諸所で講演をしたり著述をしたりして、得た十三萬八千圓の金をこの會に出すといふ勢で、陸續と義金が集つて來た。かの有名な文豪ワシントン・アービングも千圓を出し、學校兒童までそれ〴〵十錢の寄附をしたのが、その數幾百萬にも及んで、千八百五十九年の終には、豫定の金額が完全に集り、その翌年に華盛頓の住宅が終に婦人會の所有に歸し、始めて國民のものとなつた。それから間もなく維持費も出來たので、今日まで

三三

ゆかしい。

立派に舊觀を存して居る。住宅としては極めて質素なものであるが、何處となく見るのにゆかしい氣持がする。

(床次竹二郎)

七 ワット その一

思想

虚弱

ゼームス・ワットの大發明は實に困苦の中より生じたるなり。ワットは西曆千七百三十六年スコットランドに生れたり。身體頗る虚弱にして、學校に入ることに能はざれば、父に就きて習字及び算術の初歩を學び、母に讀方を教へられしが、天性聰明にして、殊に物理の思

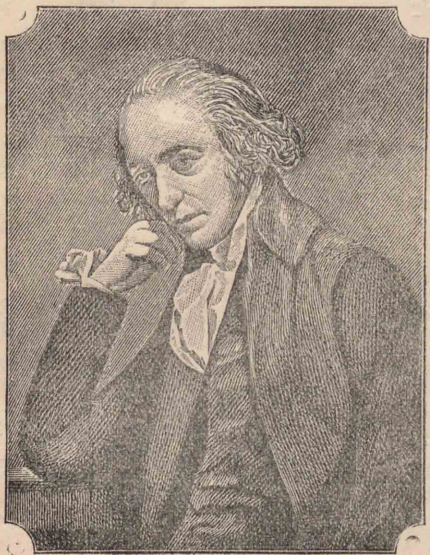


外し  
巧妙  
しわざ

蒸氣

杯

想に富み、五六歳の頃より容易に數理を了解したり。又好んで大工道具の如きものを遊び、その各部を取り外して新に組み合することを、この上なき樂とせしが、その技の巧妙なること、小兒のしわざとは思は



トッワスムーゼ

れざる程なりき。茶釜の蓋を取りて、立ち升る蒸氣の中に食匙を横たへ、蒸氣を凝しめてこれを杯に移すことなども、その遊戯の一なりき。後年

機關

活計

虐待、  
虚弱

忍耐

に至りて、彼が蒸氣機關を發明したるは、決して偶然の結果にあらざること、これにて知るべし。

ワット十八歳に達したる頃は、その家の貧困なるがため、自活せざるを得ざることとなり、グラスゴー市に行きて、活計の途を求めたり。まづ數學器械の製造者に雇はれんことを志したれども、折悪しく相當の口なければ、ロンドンに至りて、ある時計師の許に奉公せり。雇主痛くこれを虐待し、早朝より夜十時まで働かせて、しかも十分に食物を與へず。ワットはあくまで忍耐せしかども、身體漸く衰弱して、日々の仕事も出



修繕

支へ。

生涯

來がたくなりたれば、已むを得ずそこを辭して、再び  
 グラスゴー市に來れり。されど前の如く職業は得ら  
 れず、餓死にも及ばんとする程なりしに、偶、グラスゴ  
 ー大學教授某氏に救はれ、その助力に依りて音樂機  
 械修繕の業を始め、同大學の樂器類の修理を引受く  
 ることとなり、辛うじて日々の生活を支へ得たり。  
 ワットが生涯の大事業はいふまでもなく蒸氣機關の  
 發明なり。はじめ硝子鑊の中に蒸氣を入れて、その膨  
 脹力を試験すること數箇月、殆ど寢食を忘れて、種々  
 の研究を積み、遂に蒸氣機關の成功を確信するに至

顧みる

着手

術

れり。この際、書を友人に贈りて曰く、余の思想の全部  
 は蒸氣機關に集注し、またその他の事件を顧みるべ  
 き餘地なし」と。ついで家屋を借り入れて製造所とし、  
 數名の職工を雇ひて、蒸氣機關の製造に着手せしが、  
 二箇月にして出來せり。

八 ワット その二

さてこれを實地に試みたるに、蒸氣處々より漏れて、  
 機關は少しも運轉せず。ワットはその術を盡してこれ  
 を修理したれども、更にその效なく、二箇月の盡力全



畢竟	材料	加ふるに	麵包	差支へ。 たとへん	博士
<p>く水泡に歸したり。これ畢竟彼が用ひたる機械及び材料の粗悪なるに因れり。既にこれまで機關試作の爲に、せらるゝ限の借財をし盡しての後なれば、今を一步もその事業を進むること能はず。加ふるに諸方より負債に攻められ、日々の麵包を買ふべき錢にも差支へ、何ともたとへん方なき辛苦を嘗めたり。幸にして一友人の紹介にて、鐵の仲買人なるルバック博士と協同して、蒸氣機關を製造すべき約束は成れり。即ち博士は金主となりて、ワットの負債一萬圓を償ひ、且機關の製造に要すべき一切の費用を引受け、ワッ</p>					

擔任	專賣特許	效果	値	失敗	履行
<p>トは蒸氣機關の製造を擔任することとなりぬ。よりてワットはロンドンに出でて、機關の專賣特許を願ひ出で、六箇月の後やうやくこれを受けて、それより製造に着手せるに、またも汽筒の鐵材等の粗悪なりしために、何の效果をも得ること能はざりき。ワット歎じて曰く、余は方に三十五歳に達したり。然れども今に至るまで、國家の爲に僅に三十五錢に値すべき公益だに起すことを得ず」と。</p> <p>金主たるルバック博士も亦商業に失敗して、協同の約束を履行すること能はず。よりてワットは已むを得ず</p>					



餽口

その事業を中止し、餽口の爲に測量師となり、虚弱の身を風雨にさらして奔走せり。

精しく

時に英國のバーミンガム市に、ボールトン氏といふ製造家あり、その鐵器製造所には一千餘名の職工を使役する程の資産家なりき。米國のフランクリンの友人にして、電氣及びその他の物理に精しく、又ワットが蒸氣機關を工夫せることはルバック博士より傳聞し居たり。然るに今やワットは再度の試作に失敗し、ルバック博士も亦破産せるによりて、他の友人は氏に勧め、博士に代りてワットの金主たらしめんとす。然れど

破産

代り

承諾

註文

果して

も氏はワットが重ねぐの失敗に徴して、容易にこれを承諾せず。三年を経て始めて承諾し、十分に資金を出したるに、この度は見事に成功して、續々諸方より機關製造の註文を受くるに至れり。多年の目的を達したるワットの喜果して幾何なりしぞ。(歐米青年立身傳)

九 流星

蒼空  
消える

試よ月のない晴天の夜、仰いで限のない蒼空を見渡すとき、忽然と現れ、忽然と消える流星が、恰も火の矢のやうな速度で、天の一方から一方へ流れるのを見



燦然

宇宙  
塵埃

るであらう。あれが流星である。流星は必ずしも明るく光つて尾を長く一直線と曳くばかりとは限らない。中では爆然たる音を發して、暗所から暗所へ滅するものもあり、又は燦然たる光輝を放つて、宛ら花火のやうな流星雨といふものもある。そもくこれらの流星は何物である。

言ふまでもなく、流星とは天體の一部である。天體といへば、直に何千哩といふ大きさを想像するであらうが、天體は必ずしも大きくはない。更しそれよりも大きな宇宙と比べて見れば、眞に塵埃と等しい。その

描く

見え。

塵埃が無邊際宇宙間を飛び廻る光景は、或は太陽の周圍を廻る地球のやうなものもあり、或は地球の周圍を廻る月のやうなものもある。而して偶地球と接近して空氣の中を突き抜けるものが、例の美しい流星となつて、燦然たる光輝を暗夜の空に描くのである。學者の研究によれば、普通の流星は平均七十四哩位の高さで光を發し、平均二十五哩の速度で進んで、地球上五十哩の高さまで來ると、消えるとしてある。即ち肉眼で見えてから消えるまでの間は、約一秒時間である。



拂曉

日没よりは夜中、夜中よりは拂曉といふやうな次第  
よその數が増して行く。その割合は丁度拂曉が日暮  
の二倍前後よかつてをる。年よついでいへば、春夏よ  
りも秋冬が多い。

隱顯出沒  
敢へて

範圍内

間斷

さて地球全體の上よ落ちる流星の數を調べて見る  
よは、まづ五六人の人が觀測よ從事せねばならぬ。隱  
顯出沒、自由自在、敢へて人界を意よ介せぬ流星であ  
るあら、中々肉眼で見盡せるやうな、狭い範圍内よば  
ありは現れぬ。されば五六の人が前後左右よ間斷な  
く瞳子を配る必要がある。一方地球上よは、五十哩乃

隨處

加へ。

至百哩を隔てて、隨處に觀測所を設けて、假よ地球全  
土の觀測所を一萬とし、五人の觀測者が、各一人よ就  
き一時間平均十の流星を觀たとすまば、一晝夜よ地  
球全土よ向つて落ちる流星の數は、實に千二百萬で  
ある。この外よ肉眼で見えないで望遠鏡に映るのを  
加へたら、その數は實よ驚くほど多いのである。

(平山信)

一〇 學生の公德

米國人の仕事の遣り方は、手を省いても用が足るや  
うにする。今學校の話をするに、圖書館で本を借るの



はひつて  
勝手  
標題

に、閲覽人が庫の中にはひつて、勝手に讀みたい本を  
持ち出し、扣帳に標題と自分の名とを記入しておい  
て、用が済めば返す。それでも本の紛失することなど  
は殆どない。僕も政治科の圖書館を暫く預つた事が  
あつたが、數萬の書物の中から、數百の學生が勝手に  
引き出しても、間違もなく紛失もないのは羨ましく  
思つた。歸朝の後、早速ある學校で同じ方法を試みた  
ら、一人の生徒は讀みもせぬ書物を七十巻も持ち出  
して、讀みたい人の迷惑は更に顧みず、それを自分の  
部屋の裝飾に供した。一人の生徒はやはり五十冊も

迷惑

落書  
公德

持ち出し、その他の借用者にも三十冊以内のものは  
なかつた。或は巻中に落書をする、或は綺麗な繪を切  
り抜く。——嗚呼これがわが國の學生の公德かと、獨  
り慚愧に堪へなかつた。

(新渡戸稻造)

一一 約束を守れ

イギリスの將軍チャールズ・ネーピアある日田舎路  
を散歩せる時、一人の少女の、圃なる父の許へ晝食を  
運ぶとて、皿をとり落して破り、うち泣くを見て、すか  
しなだめ、この金にて新しきものを買へ」とて、衣嚢を

散歩



財布	請待狀	尋ね	断り	遂げ
<p>搜りしが、いかにして忘れしか、財布なし。餘儀なく、明日今頃にこゝに來よと約束して、別れけり。然るにその夜友人より、明日來られよといふ請待狀來りけり。普通の者ならば、名も知らぬ少女との約束は打棄つべきなれど、道德家の將軍なれば、いかにすべきかと考へし末、少女の家も名も分らねば、尋ねてもゆかれず、代人をやらんにも顔を識らねばとて、友人には先約あればゆかれずと断り、翌日老將軍自ら出向きて少女に逢ひ、約束を遂げたりといふ。</p> <p>ギリシヤの學者ピシヤス、時の暴君ダイオニシヤス</p>				

宣告	訣別	冷笑ひ	筈	日數	噂
<p>の怒に觸れて、罪なくして死刑の宣告を受けけるが、一たび故郷に歸りて、家族に訣別せんことを願ひけり。王冷笑ひて、一たび放たれしものが、わざ／＼殺されに歸る筈なし。偽りて逃げんとするならん。とて許さざりしを、不安心に思召すならば、歸るまでの身代りに。とて親友デーモンといふを差出しければ、日數を限りて歸郷を許されけり。かくてその日限もきるるばかりになりしかど、ピシヤスより何の便りもなし。さては逃げしならんといふ噂高くなりけれど、身代りのデーモンばかりは、獄中にありて少しも不安</p>					



いひぬ。

心の氣色なく、必ずその日までには歸り來るべしといひぬたり。

据ゑ。

いよくその日は來りぬ。ピシヤスが約束に背きし上は、身代りなればとて、罪なきデーモンは引き出され、斷頭臺の下に据ゑられたり。されどもデーモンはわるびれたる様子もなく、おちついていひけるやう、親友ピシヤスは決して約束を破るやうなる男にあらず、歸り來らざるは、何事か思はぬ妨の生じたるならん。かくいひつゝ、徐かに頸をさしのべて、刃を受けんとしたりける時、ピシヤスは驅けつけ來り、刑場に

男

刃 徐かに

後れ

ふるまひ。

遂に

傳へ。

走り入りて、途中大風にあひて船の進まざりし爲に、時日の後れたりし由を語り、速に死刑に處せられたしと願ひ出でけり。さすが暴君のダイオニシヤスも二人のふるまひに感じ入り、これぞ眞の友なるあゝわれもかゝる友こそほしけれ。」と羨み譽め、遂に二人ともに赦しけり。

(坪内雄藏)

一二 信義と堪忍

蒲生氏郷の家に、佐々木の鎧とて、代々傳へたる寶物ありき。細川忠興切りにこれを譲り受けんことを請



懇  
重器

ふ。蒲生の臣亘理八右衛門主に勧めて曰く、懇なる望  
斷りがたけれど、この重器を他家には渡すべからず。  
同じやうなる品をそれなりと稱して贈るべし」と。氏  
郷曰く、古歌にも、

ふき名ぞと人には言ひてありなまし、

心の問はばいかが答へん。

とあり、他をば欺くとも、自ら心に恥ぢざらんや。とて、  
かの鎧を取り出して贈れり。その後、忠興蒲生家の無  
二の名器なりと聞き、氣の毒なることしたりとて、こ  
れを返す。されど受けず、氏郷歿して後、その子秀行に

無二

大阪の役の冬の陣は慶長十九年(二二七四年)の冬、夏の陣は翌年の夏

はじめ

木村長門守重成

手に汗を握り

案に相違し

肩身も狭く

至りて、始めてこれを收めたりといふ。

大阪の役に、城中にては、眞田幸村、後藤基次等最も武  
名あり、木村重成も若年ながら彼等に竝んで沈勇の  
譽ありき。はじめ、城内にて掃除坊主が重成を侮り辱  
めたることあり。傍の人々、すは事出来れり、長門守い  
かなることをかすべきと、手に汗を握りて見居たる  
に、重成は憤れる色もなく、思ふ由あれば、汝を許す」と  
言ひ棄てて、足早に奥に入りぬ。人々案に相違して、重  
成を嘲るもあり、坊主を譽むるもあり、これより重成  
は日に、肩身も狭く見え、坊主は愈、誇り高ぶれる

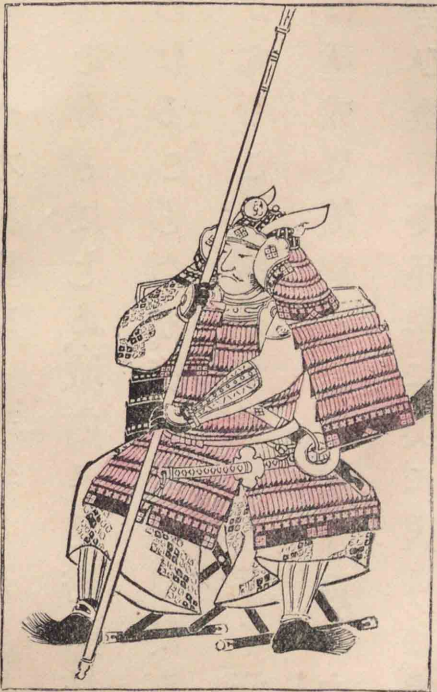


佐竹義宣

舌を巻き

感歎

謙遜



木村重成

けしきありき。然るに冬の陣起るに及びて、鳴野の邊にて、重成は佐竹氏の堅陣を衝き、大剛のはたらき敵御方の目を驚かす。さすが武勇の基次も舌を巻きて、思ふ由ありといひしこと、今思ひ當れり。とて、感歎せり。されど重成はなほ謙遜して傲らず、夏の陣の時、若江口にて思ふほどの軍して、討死したりき。

一三 猿智慧

夕日

昨夕

羹

三筋

西山にかゝりたる夕日の、ちらくくと木の間よりもれくるを背に受けて、山里の淋しさを物語る猿と狐とありけり。猿「さても今年の寒さの烈しさと、温きものにも食はずば、凌がるべくもあらず。君は昨夕も鼈の羹を食ひたまひけるこそ羨ましけれ。さるにても水の中なる物をば、如何にして獲たまふぞ、うまさき事は一人してせぬものなり。教へたまへ。」といへば、狐笑ひて、毛の三筋足らぬより人間になりそこれたり



智慧者

尾

といふ智慧者にも似ぬことかな。夕暮のほの暗き折、彼處の池にゆき、水の中に尾を浸し、鼈のくひつくを待ちて、引き上ぐるまでにて、何の子細もなき事なり。と教へけり。

妙案  
馳走

いとゞ

念じ

ござんなれ

「まことに妙案なり。御傳授にて吾も今宵は鼈の馳走にありつくべし。」と悦び勇みて、池に走りゆき、教へられし如く尾を浸して待ちけるに、鼈のくひつくべき様子もなく、夜はふくる、寒さは寒し、いとゞ堪へ難きを、今しばしと念じて待つ程に、やがてひりくくと尾を引かるゝこゝちす。さては鼈ござんなれと、引き上

閉ぢつめ

忌々し

顔

短く

げんとするに、あがらず。こはいかにとふり返れば、池は一面に凍りふさがりて、大切の尾は氷に閉ぢつめられたり。忌々しや、狐めに一杯くはされたりと、全身の力をこめて、えいやと引けば、尾はふつと切れて、顔は眞赤になり、今更ひとまねの猿智慧をぞ悔みける。これより猿の尾は短く、顔は赤くなりけりとぞ。

一四 イソップ訓話

一 占星者と旅人

一人の占星者があつて、頻に星を眺めて居るうちよ、



詮議

空想

誤つて濠に落ちこんだ。そこへ通りかゝつた旅人が、  
「君よ。この失敗を鑑みて、これより星を觀測する前よ、  
ちと自分の足下を注意したら善からう。」と言ひまし  
た。  
徒らに他人の運命を彼是詮議するより、自分の身の  
上を注意するのよ。無益の空想を時を費すのは何  
の效もない事である。

二 水神と樵夫

斧

樵夫が河の畔で樹を伐つて居たが、誤つて斧を水に  
落し、大切の商賣道具を失つて、酷く弱つて居る所へ、

領いて

褒美

慾

忽然と水神が現れて、その子細を聞きとり、やがて水  
に沈んでしまつた。暫くして、水神は手に黄金の斧を  
持つて、再び姿を現し、「汝の斧はこれである。」と問う  
た。樵夫はつくづく見て、「これでは御座りませぬ。」とい  
ふと、水神は領いて再び水中に沈み、今度は銀の斧を  
持ち出して見せたが、これでもないかと答へたので、改  
めて水中より鐵の斧を持ち出して、樵夫に與へなが  
ら、その正直を賞め、金銀の斧をも添へて、褒美にやり  
ました。

慾の深い爺があつて、この話を聞き、翌朝わざと河



周章て

横着者

の邊は行つて斧を落とし、さめくと泣いて居ると、案の如く水神が現れ出て、水中から金の斧を持ち出して見せた。爺は周章てて、それお私の斧です。」と言ひもあへず手を出すと、水神は、「この横着者、人の心を見貫く神を欺き得ると思ふか。」と叱りつけて、鐵の斧すら戻してくれませぬでした。

三 鳥と獸と蝙蝠

互角の勢

蝙蝠

或日鳥類と獸類との間に戦争が起り、暫くは互角の勢で、勝負の程も判りかねた。その時鳥とも獸ともつかぬ形の蝙蝠は、その日くくの旗色次第で、鳥の御方

好い顔

會合

二心

もすれば、獸の御方にもなり、何時も好い顔で居りました。その中雙方和睦となり、鳥と獸との會合があつて、どちらも蝙蝠の二心を惡み、今後互に一切仲間入をさせぬことに、固い約束を結んだので、蝙蝠もさすがに恥づかしくなつて、その後は晝は外へも出ず、軒の片隅や汚い洞穴に身を潜め、夕方にそつと人目を忍んで飛び廻るやうになりました。

四 獅子の皮を着た驢馬

驢馬が、何處からか獅子の皮を見つけ出して來て、それを被り、森や牧場を歩くと、馬も牛も皆驚いて逃げ



調子に乗つて

飼主

言ひ懲し

出しました。そこで驢馬は調子に乗つて、今度は人間を驚かして見ようと、早速飼主の前に現れると、飼主はその長い耳を一目見て、直にそれと覺り、棍棒を持つて一打くはせながら、如何に獅子の皮を被つても、驢馬はやはり驢馬であるぞ。」と言ひ懲しました。

五 黄金の卵

段々

或人、日に一つ黄金の卵を産む鶯鳥を飼つて、殊の外大切に居た。處が段々慾が增長して、こんな卵を産むからには、必ず腹中に黄金の大きな塊があるに相違ない。一つ宛取つて居るより、いつそ一度にとり

失望

出して見ようと、或日鶯鳥を殺して、腹の中を見ると、何も見つからなかつたので、大いに失望したといふことである。

(新譯イソップ物語)

一五 兎狩

つくるひ。

貼札

拵へる

收穫が濟む、霜が降る、裏山の楓が染まる、すると兎狩の季節がそろそろ始る。つくるひに遣つてあつた網も出来て来る。何日は兎狩といふ貼札が出る。脚絆、草鞋の用意に急がしくて、僕等は何も手に着かない。愈その日になつた。炊事番は夜半に起きて、握飯を拵へ



支度  
沔え。

吠え。  
越え。

見え。

る。皆支度して塾の庭に勢揃へする頃は、午前三時過  
でも何らう。月が白く沔えて居る。三たび関の聲を揚  
げて、月影を踏んで出かける。大人組は綱をかついで、  
高らかに詩を吟じて行く。僕等は黙つて、併し心は得  
得として、ついて行く。

ねむさうな雞の聲のする村も過ぎ、けたましく犬  
の吠えかゝる村も過ぎ、野路を通り、谷川を越え、もう  
一里半も來たらう。月が落ちて、野は一面の曉闇、前に  
行く者の姿もはつきりとは見えぬ。ふとすばらしい  
大きな眞黒なものが鼻の先に現れる。山だ、目的の山

焔  
つい。

だ。まだ早い。皆焚火をしながら天明を待つて居る。  
僕は藁の上に寝ころんで居ると、背は寒いが、顔や腹  
は焚火に暖つて、炎々と立ち升る焔の間に、ちらく  
見えて居た一同の赤い顔が次第に遠くなつて、つい  
うつとりと一寐入したと思へば、起される。眼を摩つ  
て起き上ると、成程天明だ。東が白んで、曉の風が切る  
様に面を吹く。焚火の跡だけ黒い圓を描いて、四邊は  
一面の霜だ。やがて勢揃へして山にかゝる。進軍の號  
令がかゝる。関の聲が一時に揚る。二山も追ふ頃は、も  
う朝日が晃々と秋の空に昇つて居る。



あらゆる

追ひつめる

今懐うても愉快だ。秋が黄に、紅に、紫に、鳶に、あらゆる彩色の限を盡した木を押し分け、葉を打ちはらひ、聲をあげて登る心地。網近くまで追ひつめて、如何かと思つて居る時、何處からか「とれた」といふ聲がして、吾



知らず棒を振つて勝鬨をあげる心地。網番をして、攻め寄せる勢子の叫の間近になるに、兎のうの字

落膽

押へる

寝、寐

數へ立てる

もかけて來ず、あゝだめと落膽する時、突然がさくと音をさせて、覗く鼻先へ飛び込んで、二つ三つ網ながらにとんぼがへる兎を、樹蔭から飛びかゝつて押へる心地。落葉かき分けて、谷川の水を口づけに飲んで、木の根、草の上に脚投げ出して、握飯にかぶりつく心地。食つてしまつて、落葉の床に仰向けに寝て、碧玉よりも澄んだ空を眺めて、汗ばんだ顔を冷々した風に吹かせる心地。數へ立てると、際限も無い。

秋の日の短さ、まだ三匹しか取れぬに、もう鴉が鳴き出した。遙に見える湖や川は金の如く夕日に閃いて



葛

居る。獲物は葛で四脚を縛つて、大人組が舁いでとくに還つた。僕等は紅葉の枝を折つて、ぶら／＼後から還つて行く。山を降りて野に出ると、日は彼方の森に沈んで、夕煙が村々に立ち升る。と思ふと、薄紫にける野末に大きな月が顔を出す。その月がやゝ高く、やゝ小くなつて、うちつれて歩み行く影の大分短くなる頃には、僕等ももう塾に歸り着いた。草鞋をぬいで、顔を洗つて、先生始め一同大胡坐で、てんでに兎汁を盛つて、飯を食ふ。大久保彦左の鶴の吸物ではないが、この兎は別名を大根、胡蘿蔔、牛蒡、焼豆腐、蒟蒻とい

大胡坐

更へ。  
寐、寢

ふのではあるまいかと思ふ程、正味は少い。併しその味、否、それよりも食つてしまつて、着物も更へず、ぐつすり寐る時の心地は、何ともいへない。夢も見ない、身うごきもしない、翌朝の九時頃までは死骸も同然だ。

(徳富蘆花)

一六 大久保彦左衛門

大久保彦左衛門名を忠教といひ、家康に従ひて戦功多く、封祿は五千石に過ぎざれども、優遇せらるゝと高祿の士に超えたり。性甚だ寡欲、また率直にして、人に對して差別を立てず、思ふ通りを放言して憚る

優遇  
超え。  
率直  
放言



駿府は今の静岡

上杉景勝  
控へて

退屈  
仰

小山は下野國に  
あり

ことなかりき。  
ある時駿府に到りしに、家康久々の對面を喜びて、さ  
まざまの物語あり。思へば關原の合戦は天下わけめ  
の争にて、前には敵の大軍あり、後ろには景勝が控へ  
て、中に夾まれし御方の運命は、いかにも危きことな  
りき。されど御方の者が命を惜しまず働きて、大勝利  
を得たる勇ましきよ。これにひきかへ、散々に敗れし  
敵のいかに見苦しかりしか。さは思はずや、彦左衛門。  
といふ。忠教はさき程よりの長咄に退屈して、仰の通  
りに候ふ。さりながら小山にて上方の大變を知らす

賜ひ、賜はり  
賜はり、賜ひ  
更(改)

る飛脚の來りし時は、君の御顔は青くなり、諸大名も  
妻子を大阪の城中に引取られたりと聞きて、眞青に  
なりしが、今かく太平の世となりて、始めて顔の色も  
直り候ふ。めでたき御事なり。と申す。家康笑ひて、よし  
よし、もはや歸りて休み候へ。とて、暇を賜ひぬとぞ。  
又ある時、將軍秀忠の前にて鶴の羹を賜はりしふと  
ありき。忠教碗を更むること數回、くどくも、これが鶴  
にて候ふか。と尋ぬ。珍しげに聽くものかな、汝は今日  
始めて鶴を食ひしか。いや、く、毎日用ひ居り候ふ。  
彦左が例の大言よ。われとても常には得がたきに、い



載せ

頂戴、載

覚え。

かてか容易く汝等の膳に上るべき。」さやうに疑ひたまはば、明日献上致し候ふべし。」と約して、さて次の日、青菜を夥しく白木の臺に載せて捧げ出づ。秀忠うち笑ひて、「これはいかなることぞ。」と問ふ。忠教答へて、「昨日頂戴せし羹も、初の間は肉と思はるゝ物もありしが、後にはこの品ばかりなり。怪しくて尋ね奉りしに、鶴なりと仰せられき。さてはわれらの菜を上つ方にては鶴と稱ふるにこそと、覚え候ひしなり。」といひたりとかや。

その頃、宇治の茶師が茶を幕府に獻るは、重き儀式に

そしらぬ

あざ笑ひ

寛永十六年は二  
二九九年

九死一生

て、途上に遇ふものは、すべて敬ひ避くる習なりき。忠教ある時これに出會ひしかども、路を譲らず。役人叱れば、そしらぬ顔つきにて、何故ぞと問ふ。曰く、「これは公方様の茶なり。」忠教あざ笑ひて、「吾は公方様の人なり、汝等こそ吾等を避けよ。」といひたり。

寛永十六年、忠教八十歳にして歿しぬ。病篤き時、將軍家光使をやりて、祿五千石を増す。忠教辭して、「存命中の御加増こそ嬉しかるべけれ。九死一生の時に成りては、何の用にか立つべき。」とて受多ず。使押返して、「御身に用はなくとも、子孫の爲ならずや。」といへば、子孫



はまた自ら忠勤を勵みて、御加増を受くべし。己の腕より生まぬ祿は、毒にこそなれ、讓るには及ばず。とて、遂に斷りて止みたり。

一七 織田信長と廻國僧

天正元年は三三三三年  
不思議  
苦患  
罪障  
信仰

天正の初、廻國の僧無邊といふ者あり。生所もなく、父母もなく、一所不定なり、吾に不思議の祕法あり、これを傳へ授る人は、現世にては無數の苦患を免れ、來世にては無量の罪障を滅す。と披露しければ、在々所々の男女深く信仰して、散錢散米席上に充滿すれども、

安土は近江國蒲生郡にあり、當時の信長の居城

目もかけず、一村一郷に一日二日づゝ、滯留して、去來常なかりき。

安心立命

有情無情  
化生變化

或時安土に來りしを、信長急ぎ呼び寄せて、既に出づる時、立ちながら無邊を睨み、客僧、生國は。と問ひたれば、無邊といふ。信長、無邊といふ處は唐土か。と問ふに、天にもあらず、地にもあらず、又空にもあらず。と答ふ。信長、天地を外にして何れの處に安心立命するの。と問ひたれば、差支へて物を言はず。信長なほ、凡そ一切の有情無情、天地を離るゝことなし。汝は化生變化の者か、いで試みん。と、馬に灸する鐵を燒きて、面上に當



戰慄

奇特

賣僧

徘徊

逸話

評論

てんとしたれば、是は出羽の羽黒山のものなり。」と戦慄して申す。此頃弘法大師の再誕なりとて、奇特を多く見するよし、この信長にも見せよ。」と責め詰めたれば、一言の返答をも申し得ず。かやうの賣僧、恣に諸所を徘徊して人を惑はすは、世の爲よろしからず、誠に神通の力あらば、まづ信長の手にかゝり、まのあたり再生せよ。」と言ひて、立ちどころに之を誅せられたり。

(名將言行錄)

一八 太閤の逸話

秀吉諸臣と古今の人物を評論せし時、諸臣皆一同に

一谷は攝津に、  
屋島は讃岐にあ  
り、共に平氏の  
據りし處

將帥

連枝

梶原景時

卓犖

應仁元年は二一  
二七年

掌握

伏見は京都の南  
にあり、當時の  
秀吉の居城

義經が一谷、屋島の功を賞し、名將なりといふ。秀吉曰く、義經少し勇あれども威儀なし、將帥の器にあらず。身は頼朝の連枝にして、殊に三軍の都督たり。然るに逆艦の論にて、梶原に猪武者といはるゝなど、偏に義經が威儀なきによりたり。古より功の卓犖たるはただ我と頼朝とのみ。然れども頼朝は源家の嫡々たれば、功を成し易し。我は匹夫より起りて、應仁以來縷の如く亂れたる天下を伐ち靡けて、今四海を掌握せり。然れば余が功は頼朝に百倍せり。」と言はれたり。

秀吉伏見にて一日廣間に出で、五腰の刀を見て、試に



おはせる

宇喜多秀家

前田利家

魁殿

柄



太閤秀吉

その主を言はんとて指させしに、少しも違はず。前田  
 玄以、誠に神智のおはせること  
 よと驚きければ、秀吉笑つて、何  
 の子細もなきことなり。秀家は  
 華美を好む故に、黄金を鑄めた  
 る刀是なるべし。景勝は父の時  
 より長刀を好み、寸の延びた  
 る刀をこれにて當てたり。利家  
 は又左衛門といひし時より魁殿の武功により、今大  
 國を領すれども、昔を忘れず、革まきたる柄の刀、是他

毛利輝元

割粥

調進

才覺

俎板

の主にあらずと思へり。輝元は異風を好み、異なる  
 體に飾りたる刀是ならん。家康は大勇にして、劍を頼  
 む心なし。取繕ひたることもなく、又飾もなき刀はそ  
 の志に叶ひたり。此を以て察したるに、違はざりけり。  
 と言はれたり。  
 秀吉高野に登山せし時、割粥を出せと言はる。暫くあ  
 りて、料理人調進せしに、秀吉悦びて、高野は白なき所  
 なり、余が粥を食はんことを知りて、白を持ち來りし  
 こと、料理人才覺の至なり。と言はる。實はさにあらず、  
 俄に多くの人數にて、俎板の上にて割りて調ぜしな



り。後に物語の時、右のこと申しければ、秀吉怒りて、無くば無しと言ひて、常の粥を出さんに、何の子細かあるべき。わが力にては、一粒づゝ割りて食はんも心のまゝなれども、さやうの奢りたることはせぬものなり。とて叱られたり。

年貢

又尾張の中村は生地なればとて、永代諸役年貢を免じ、年頭の祝儀には、大根、牛蒡を献上すべしと命ぜり。秀吉朝鮮陣三年目に大阪に歸城したれば、中村より、今度朝鮮を切り取られたる祝儀として、越前綿を大臺に積みて献上せり。秀吉曰く、日本は申すに及ばず、

作り取

朝鮮まで切り取り、何にても事闕くことなし。中村の百姓ども、永代作り取に申し付けられたれば、はや奢出でて越前綿をくれたること、愚さを極めたり。牛蒡、大根は國の名物にて珍しく存じ、内々相待つ所に、申し付けたる義に背き、不届のことなり。當年より年貢上納すべき旨、屹度申し付けよ。と甚だ不機嫌なりき。

(名將言行錄)

一九 くいてくはず

二宮翁が櫻町の陣屋にありし頃、出入の疊職人に源吉といふ者ありき。口を能くきゝ、才ありといへども、

二宮翁名は尊徳  
櫻町は下野國に  
あり



心得違  
不意に

偶然に

遊惰なれば、常に貧乏せり。年末に及んで、翁の許に來り、餅米の借用を乞ふ。翁曰く、汝の如くいつも家業を怠る者が、正月なればとて、年中勉強したる者と同様に、餅を食はんとするは、心得違なり。正月は不意に來



二 宮 尊 德

るにあらず、米も偶然に得らるゝ物にあらず。正月は三百六十日あけくれして來り、米は春耕し、夏耘

食ひたく

肥

悔い。

説諭

り、秋刈りて、始めて得らる。汝は春耕さず、夏耘らず、秋刈らず、米なきは當り前の事なり。されば正月なりとも、餅を食ふべき道理あるべからず。今貸すとも、いかにして返さんや、借りて返す道なき時は、罪人となるべし。正月に餅が食ひたくば、今日より遊惰の習を改め、山林に入りて落葉を搔き、肥を拵へ、來年、田を作り、米を得て、來々年の正月、餅を食ふべきなり。まづ來年の正月は、己が過を悔いて、餅を食ふ事を止めよ。」と懇に説諭せられたり。

源吉大いに先非を悔い、遊惰にして家業を怠りなが



迎へ。

祝ひ。

しをく。

添へ。

與へ。

ら、年中勉強する人と同様に、餅を食ひて春を迎へんと思ひしは、全く心得違なりき。この度は餅を食はず、過を悔いて年を取り、年明けなば、二日より家業を始め、刻苦して、來々年の正月は、人並に餅を搗きて祝ひ申すべし。といひ、厚くその教訓を謝して門を出づ。翁は源吉が志をくとして出で行くを見て、俄に呼び戻して曰く、予が教訓能く腹に入りたるか。源吉曰く、誠に恐れ入りたり、生涯忘れずして勉強すべし。翁乃ち白米一俵、餅米一俵、金一兩に大根、芋等を添へて與へらる。これより源吉は生れ替りたるが如くなり

終へ。

て、生涯を終へたりといふ。

二宮翁夜話

二〇 河村瑞賢

豪富

纔に、僅に

元來

徳川氏の世、町人の豪富を以て聞えたるもの多かりし中に、河村瑞賢の如きは最も名高き一人なり。瑞賢が一生の事業少からざりしが、その最も力を盡ししは奥羽の漕運と畿内の治水となり。をじめ瑞賢江戸にあり、車力を業として纔に世を過したりき。されど元來大志あるものなれば、久しくこのやうなる職業に安んずること能はず。ある時思ひ



上方へ。

一分は金一兩の  
四分の一

ついで

上方に。

歸、還

げにも  
還、歸

立ちて、上方へ赴きて身を立てんと欲し、少しの道具を賣拂ひて金二三分を得、これを懐にして西上せり。途に小田原にて一泊せしに、同宿の一老人談話のついでに旅行の故を尋ねしかば、瑞賢その志を告ぐ。老人笑ひて、日本一の江戸を捨てて上方に行きたりとも、何のよき事かあらん。察するに御身は家を起すべき人なり。直に江戸に歸りて奮勵せられよ。」と諭しかば、瑞賢げにもと悟りて、また東へ還りぬ。かくて江戸に近づきたるに、折ふし盆すぎにて、瓜茄子の類夥しく品川の海岸に流れ寄りたり。瑞賢ふと

七三

鹽漬

鹽梅

災、災

僅に、織に

携へ。

思ひつき、その邊の乞食どもを雇ひてこれを取り上げさせ、鹽漬にして普請小屋に持ちゆきたるに、大勢の日雇等晝食の菜にせんとて、争ひて買取りぬ。これより更に鹽梅よく漬物を仕込みて賣出し、普請方役人の氣に入りて、幾ほどもなく日雇頭となりぬ。偶、市中に火事ありて、瑞賢の家も災にかゝれり。瑞賢少しもこれに頓着せず、折から風烈しければ火は次第に大きくなるべしと見込みて、僅に十兩ばかりの金を携へて、夜を日に繼ぎて木曾に向ひぬ。その地に着き、ある材木問屋の前にその家の子供の遊び居る



極印 捺し 騰貴 追々

を見て、小判二三枚取り出し、小刀にて穴を穿ち、こよ  
りを通して手遊にとて與へぬ。さて主人に會ひて、急  
用あれば、材木多く求めたし。といふに、主人はさきほ  
どの振舞を見て、いかさま大家の人なるべしと深く  
信じたれば、即座に賣買の約束をなし、瑞賢はすべて  
その材木に己の極印を捺したり。かゝるところに江  
戸大火にて材木乏しく、その價俄に騰貴せしかば、材  
木商追々木曾にはせ來りて、これを求めんとす。され  
どあらゆる材木は既に極印を捺したるに、いづれも  
是非なく瑞賢を頼みて、その分配を請へば、瑞賢はこ

棟瓦 壊れ 請負はする

損耗 手段

れを高價に賣り、立ちどころに數千金を得て、江戸に  
歸りぬ。これより家宅も廣くし、手代、召使も多く雇ひ  
入れて、處々の普請を請負ひぬ。  
ある時、増上寺の本堂の棟瓦壊れ落ちたり。その修繕  
を入札にて請負はするに、破損は僅のことながら、足  
場を造るに大いなる費用を要すべしとて、人々の申  
し出づる價ことの外高し。然るに瑞賢だけはその價  
他の三分一にも及ばざりければ、札はその手に落ち  
ぬ。皆々、さすがの瑞賢もこの度は損耗すべし、さるに  
てもいかなる手段を試みんとするにやと、噂したり。



狂は。せ

繩梯子

杙

須臾。更。

鉅萬

瑞賢は本堂の前にて大いなる紙鳶を揚げ、棟を越えたる時、これを狂はせければ、紙鳶は彼方に落ちて、絲は棟を跨げり。その絲の一端に繩梯子を繋ぎ、他の一端より繰引にし、よき程を計りて、地上に立てたる杙に結び附くれば、直に梯子は出來上りぬ。乃ち少しの人夫をして、瓦を携へて棟に登らしめ、須臾のうちに修繕を終へたりといふ。

かくの如く瑞賢は才智湧くが如く、機に臨み變に應じて自在に事を行ひしかば、久しからずして鉅萬の富を重ねるに至れり。晩年に及んで士籍に列せられ、

元祿十二年は二  
三五九年

元祿十二年歿しぬ、年八十二。

二一 紙鳶

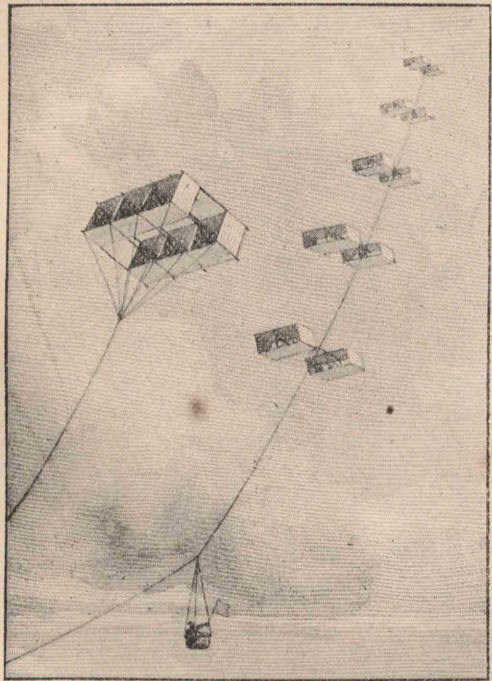
順風

絲を放てば、見るく棟を越え、森を越え、遙の山をも越えて、高く晴天に舞ふ。順風に乗る時は、帝王の如く晏坐して、飛ぶ鳥も近づかず、狂風に捲かるゝ時は、射られたる鷺の如く、暴れに暴れて地上に墜つ。三々五五、空を睨んで高低を争へば、身に沁む風も寒さを知らず。若草萌ゆる廣野に、絲卷繰る手の忙しきも、尙更に疲を覺えず。紙鳶を揚ぐるは、冬より春に互りて



行はるゝ少年の忘れがたき樂なり。  
 紙鳶には大小さまざまあり、その形も種々ありて、中には操仕掛のものさへあり。地方によりては、大いなる紙鳶を揚げて、互に引つけ合ひ、對手は絲を切り、勝敗を争ふ。絲には、或は鎌を結びつけ、或は硝子の粉を塗り、大人も小兒もうち交りて郊外に陣どり、戦半ばならずして日既に傾く。また盛んなるは紙鳶の丈數間に及ぶもあり。近頃はこれらの遊も次第に減じ、又都會にては、電線に遮られて、恣に絲を動かすこともならずなりぬ。

恣に  
 或は  
 互に  
 初、始  
 普通



この玩具も、外國にては古くより學術の用に供したり。西曆一七四九年、寒暖計を附けて空中の温度を測りしを、その始とす。フランクリンの試験はこれに後るゝこと三年なりき。その後、紙鳶の使用漸く繁く、用法も進み、驗風計、自記寒暖計等を附けて、空中に飛揚せしむ。その形は初は普通のものなりしが、前世紀の末に、新式



豫報  
消閑

の箱形のを發明せり。重量甚だ少くして、風を受くること極めて大いなり。これを一個にても、又は數個を一つなぎにしても用ひ、絲に代ふるにしなやかなる鐵線を以てし、蒸氣の力によりて扱ひ、以て氣象計を三哩の高さに揚ぐることを得たり。空中の氣壓、溫度、濕度、風力等かくの如くして細かに測定せらるるなり。

氣象の變化はまづ高處に起る、この理を應用して、歐米各國ともに、今日にては測候所に紙鳶を備へて、天氣豫報の具とす。こゝに至りて一時消閑の玩具は變

必須

撮影

偵察

翔り  
任務

魚  
終へ。  
鯛

して人世必須の器となれり。また軍事にも用ひられて、大小二種あり。小なるは寫真機を附け、電氣の作用によりて、暗函あんぼくを開閉して、敵の堡壘を撮影す。大なるは偵察者自らこれに乗り、五十尺も百尺も高く空に翔りて任務に就く。輕氣球より輕便にして費用も少きを以て、多く用ひらるといふ。

二二 需要と供給

ある魚商得意先をかけ廻りて、大方擔ひし魚を賣り終へしが、只一尾の鯛殘れり。如何にもして日の暮れ



價

ぬ中に賣らんと思へども、到る處に斷られて、鯛は益  
ふるくなれば、遂に損失をも顧みず、半分の價に減じ  
て、辛うじてその日の荷を下しぬ。

鯉

日和

街を賣り行く魚賣の聲、今日ハ昨日に變りて甚だ勇  
まし、海も凧ぎて大漁なりしなるべし。價を問へば、先  
日のしけには、一圓にても買ひ難かりし鯉の、今日は  
三十錢なり。明日は同じ日和にても、肴の價は倍に騰  
るべし。隣の町の祭禮なれば、價に拘らず、飛ぶが如く  
に賣れゆかんこと受合なり、廉き肴を得んと思はば、  
今日のうちに買はれよ。」と魚賣の勸む。

廉き肴

卓越

名利

成敗  
優劣

缺く

いかなる物品にても、これを需むるもの少ければ、そ  
の價低く、多ければ高し。人の世にあるもまたこの理  
に戻らず。卓越の器も時に要なきは重んぜられず、才  
氣は劣りても、爲すところ世の需むるところと相合  
へば、その成功驚くべきものあるべし。名利は人生の  
目的にあらず、事業の成敗によりて、人物の優劣を測  
るべからざれば、時に遇はずとて漫に不平を鳴すは  
不可なり。

また大切なる物も、量多ければ貴からず。空氣は人間  
の一刻も缺くべからざるものなれども、到る處にあ



設け

盆栽、裁、載、載

制限

れば、常は價あるものとも思はれず。されど水底深く  
潜水器の中に運ばるゝに及びては、一升量の空氣も  
少からざる價あり。片山里に住む人の、水に價ありと  
は信ぜざるに、水道を設けて飲料水を引く都會にて  
は、その使用に代價を拂はざるべからず。土はもと價  
なく、物の極めて廉きを價土の如しとさへいへども、  
大都會の中央にては、盆栽の土すら金錢に代へざる  
べからず。欲するまゝに得べきものは價なし、價は供  
給を制限せらるゝに至りて、始めて生ずるものなり。  
されば商品の市場に出づること多き時は、その價低

需要  
供給

仰ぐ

模範

く、多くとも、これを需むるもの更に多くば、その價高  
し。一幅の書畫にて數千金の價のものあり。又大火後  
の木材の價は、平常の二倍にも三倍にも騰るべし。こ  
れを物價は需要、供給の關係によりて定まるといふ。』  
金の貴きは、産出の少きが爲にして、金剛石の愈、貴き  
は、愈、稀なればなり。鐵は有益なれども、供給至つて多  
ければ、世人はこれを貴しとせず。われらの世に立つ  
や、金の如くせんか、また鐵の如くせんか。金も仰ぐべ  
からず、鐵も卑しむべからず、かれらが各、その性を盡  
して變らざるところを模範とすべきなり。



二三 石炭

うづもれ

燃え。



石炭原の料となしり太古の森林

石炭は、むかし繁茂したりし大森林が、地變の爲に土砂の下にうづもれて、數十萬年を過ぎ、その質おのづから分解して、燃え易き部分のミ残りたるもの

純良

交通機關

消費額

燃料

なり。まづ泥炭となり、褐炭に轉じ、黒炭に移り、遂に無煙炭となるものにして、年を経ること久しきものは、煙炭となり、純良なり。純良なるものは煙なく、臭氣なくして、火力強し。

石炭は日常煖爐、風呂罐などに用ひらるゝのみならず、交通機關及び種々の製造業には、一時も缺くべからざるものにして、國家の盛衰は實に鐵と石炭との消費額の多少によりて定まるといふ程なり。石炭はまた燃料となる外に、これより種々の重要な品を得べし。蒸焼にすれば石炭瓦斯を生じ、その滓は骸炭



副産物

と稱して、また高熱を發する燃料なり。なほ瓦斯製造の副産物にはコールターール、石炭酸、アニリン色素等あり。

わが國にては、古來、石炭を、からすいし又いしずみなど稱して、或は藥品に用ひ、或は薪炭に代へたることをありしが、廣く實用に供したるは近世のことなり。

嘉永年間、米艦の來りしより、世人始めてその必要を知り、幕府もまた採掘を命じたりしが、近頃に至りてその業殊に進めり。炭田の最も大いなるは九州にあり、北海道のものこれに次ぎ、磐城、常陸に互れるもの

採掘

嘉永元年は二五〇八年

八二

またこれに次ぐ。全國の産額、明治四十一年には殆ど千五百萬噸に達せりといふ。

世界の石炭の産出年額は八億噸に近し。最も多きは北米合衆國、次はイギリスにして、共に二三億噸を産し、ドイツこれに次ぐ。この三國の合計は世界年額の八割に當れり。その消費額も亦甚だ多くして、わが國はこれに比ぶべくもあらず。將來益、工業を進め、通商を盛んにせんと欲する吾等は、これを思へば恥づかしき限なり。石炭は大いに求むべく、又大いに費さざるべからず、勵まざるべけんや、わが同胞よ。

將來



二四 煖室法

坐、座  
經濟  
オノヅカラ  
不活潑  
曲亭馬琴ハ今ヨ  
リオヨソ百年前  
ノ小説家  
座、坐

家屋ノ構造ノ異ナルニ從ヒテ、煖室ノ設備モ亦異ナ  
リ。ワガ邦ニテハ普通ハ火鉢ヲ用フ。火鉢ハ、坐シテ手  
ヲ煖ムルニ、少シノ炭ニテ事足レバ、經濟ノ上ニハ甚  
ダ適當ナル設備ナリ。然レドモソノ用僅ニ手サキヲ  
煖ムルダケニテ、室内ノ溫度ヲ高ムルコトナケレバ、  
オノヅカラソノ側ヲ離レ難クナリ、從ツテ人ヲシテ  
不活潑ナラシム。又アシキ瓦斯ヲ生ズレバ、衛生ニモ  
害アリ。曲亭馬琴ガ晩年明ヲ失ヒシ原因ハ、平常座側

障子  
火燧  
簡便

ニ置キタル火鉢ノ惡氣ノ爲ナリキトイフ。但ワレラ  
ノ家ニハ紙障子ヲ用フルガ故ニ、自然ニ空氣ノ交替  
アリテ、大イナル害ヲ免ルトイヘドモ、ソノ代リニ室  
内ノ溫度モ亦十分ニ保タレ難シ。火燧ノ人ヲシテ不  
活潑ナラシムルコト、火鉢ヨリ甚ダシキハ、イフマデ  
モナシ。  
西洋ニテ古クヨリ行ハレタル爐ハ、目ニ見ユルホド  
ノ效ナシ、ソノ煖室ノ度ノ發熱量ノ二十分ノ一二過  
ギザルガ如キハ、巧ナル設備トイフベカラズ。サレバ  
世ノ進ムニ從ヒテ、簡便ナル方法ハ備レリ。



下層

あめりか人ハ世界ノ中ニテ最モ強キ熱ヲ取ル。ソノ方法日ニ〜新ナルガ、今ハ家ノ下層ヨリ上層ニ貫キタル、大煙突トモ大爐トモイフベキ物ヲ設ケ、各層ノ室ニ面スル處ニ、一種ノ開閉器ヲ備フ。室ヲ暖メントスル時ニハ、最下層ノ處ニ、多量ノ石炭ヲ入レテ、一時ニコレヲ燃ス。ハジメ煙出ヅレバ、開閉器ヲ閉ヂ置キテ、コレヲ屋外ニ逃レシメ、煙ノ止ミタル頃、開閉器ヲ開ケバ、熱氣ハ直ニ入り來リテ、室内ノ溫度一時ニ高マルトイフ。何事ニモ忙シキあめりか人ニハ、最モ適當ナル設備ナルベシ。

壓搾

微温

どいつ人ハ節儉ヲ重ンジ、一切ノ設備ハ皆ソノ性質ヨリ割り出シテ成ル故ニ、暖室法ノ如キモあめりかノモノト全ク相反ス。マヅ室ト同ジキ高サノ陶器ノ爐ヲ作り、夏冬トモニ室ノ飾トシテソノ一隅ニ置ク。冬季、暖室ノ要アレバ、煉炭ト稱シテ、石炭ノ粉ヲ煉瓦ノ如キ形ニ壓搾シタルモノヲ入レ、煙ノ出ヅル間ハ下方ナル通風窓ヲ開ク。ヤガテ煙盡キタリト思ハル頃、コレヲ密閉スレバ、熱氣ハソノマヽニ存シテ、昨朝入レタル煉炭ガ今朝ナホ微温ヲ保ツトイフ。蒸氣管ニヨリテ温ヲ取ル法ハ、ワガ邦ノ大イナル建



長距離

耐へ。

發達

抵抗力

鍛鍊法

造物又ハ長距離ノ汽車ニ用ヒラレテ、人ノ知ル所ナリ。コレヲノ設備ハイヅレモ火鉢、火燧ニ比スレバ、頗ル進歩セルモノナレドモ、カク進歩シタル設備ナクシテハ、寒氣ニ耐ヘズトイフコト、コレ果シテ人體ノ發達ト稱スベキカ。明治三十七八年ノ戰役ニ、敵ハ日本人必ズ寒氣ニ敗レント豫期セシニ、實際ソノ事ナカリシハ、一ツハワガ邦ノ煖室ノ設備ガ不完全ナル爲ニ、却ツテ身體ノ抵抗力ガ強キニヨリシナルベシ。文明ハ機械ノ設備ヲ完クスレドモ、人ハ別ニ身體ノ鍛鍊法ヲ講ゼザルベカラズ。

二五 田舎の生活

村是

調査

なほ。

衣に織る絹、絲に紡ぐ綿、肉、蔬菜、家の柱、これらは悉く農民の産出するものにして、去かも農民は少しも奢ることなし。鳥取縣に於ける村是調査によれば、その農民の常食は米一升、麥七合の割にして、朝飯には屑米を餅の如くにして食すといひ、又神奈川縣中村の調査によれば、普通には米四、麥四、粟二の割合なりといふ。されど一般の農民の常食を見るに、この調査よりはなほ遙に低度にあるもの多きが如く、芋粥に腹



を膨れさせ、玉蜀黍に飢を凌ぐものの數、全國を通じて甚だ少からず。

纏ふ。

枚、枚。

依然として

裕

衣服も亦然り。市人の絹を纏ふ今日、農民の間には、中等以上のものにて、婚嫁の時、男女共に名ばかりの絹衣装一枚を作るに止るが多く、世の流行は幾たび變遷しても、その一枚の晴着は依然として式日に用ひらるゝなり。明治三十六年の神奈川縣豊田村の調査によれば、羽織は一人につき三枚、衣服は十枚、寢具は一枚に當れり。衣服の十枚の如き、やゝ贅澤に聞ゆべけれど、仕事服二枚、浴衣一枚、單衣二枚、裕三枚、シャツ

富豪

僻遠

誇る

二枚にて、既に十枚に達せずや。寢具の一人一枚に至つてはいかに、その苦樂を察せよ。思ふに一村の中には、富豪もあり、多くの衣類を所有するものもあるべし。ければ、貧者には一枚の着替だになきものあるべし。特にこの村は中央の大都會に近く、開化の度もやゝ高かるべければ、僻遠の地に至つては、その狀想ひやるべし。

都會の賤民の裏長屋に比ぶれば、農民の住居は誇るに足る値あり。鳥取縣湖山村の調査によれば、その村民、中農以上は二十坪以上の建坪に住み、小農といへ



膝を容る、

ども十坪を下るものなし。これによりて一般の田舎を推し得べくば、都會の家屋に比べて、その廣きこと知るべきなり。よしや又むさくろしく、膝を容るゝに足らざるものありとも、屋外は山高く水清く、飾るに草あり、木ありて、天地はおのづからなる農民の天地なり。

吊<sup>。</sup>罎<sup>。</sup>

老い。

住家に於ける爐は一段の趣あるものなり。農家の爐は面積割合に廣く、丸薪、割木の類を燃し、上より自在鍵を吊り、大いなる藥罐を掛くるを常とす。湯を沸し、暖を取り、これを繞りて、老いたるも、幼きも、家内のも

のも、近所のものも、中よく何くれとなく物語る樂しさよ。

余嘗て奥羽に旅行し、行き暮れてある農家に一夜の宿を借りたることあり。例の爐邊に坐して、稗飯、味噌汁の馳走に舌うちぬ。やがて老婆は小兒を伴うて爐の一角に坐し、亭主と七八町隔りたる隣家の亭主とは余の向う側に踞し、傍の煤けたる二枚屏風にすきまもなきまで貼り附けたる錦繪を指さして、かれやこれやと、昔の風、他國の噂など話し合ひ、余に近頃の東京の様など尋ねて、一同愉快に一日の勞を慰めぬ。

貼<sup>。</sup>罎<sup>。</sup>



逸事

その後なほ諸方の田舎の住居を視て、爐の勢力の大いなることを知れり。若しそれ煙ぬきを完全にして、衛生に注意し、屏風、柱壁などに地圖、繪畫を貼り附けて、澁茶一碗、他郷の風俗を語り、偉人の逸事を談じ、また耕織の事業を評せしめんか。一日の勞を癒し、樂のうち、益を享くること、いかばかりぞや。

田園生活

衣服よりも、飲食よりも、人は住居によりて感化を受け易し。廣き天地に住むものは、氣おのづから廣く、小事に拘らざるなり。田園生活なるかな。

(田舎之日本)

二六 能代の防風林

いと

繋ぐ

能代川また米代川ともいふ

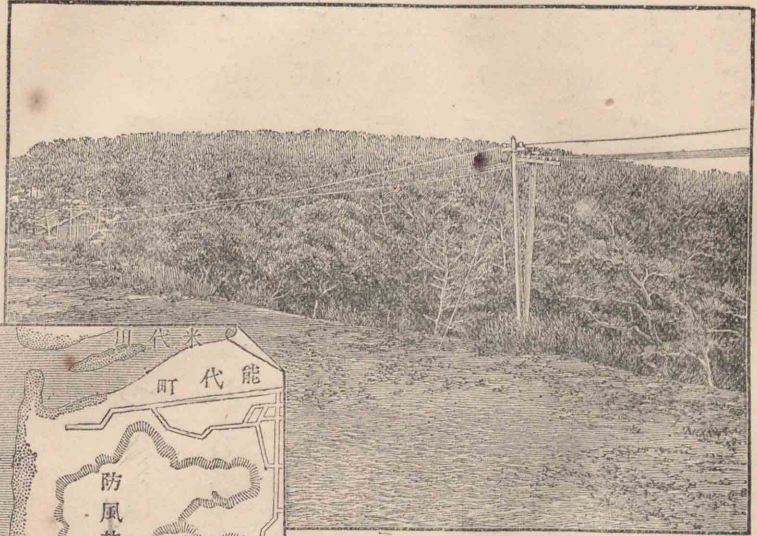
能代の市街を出づれば、直に沙いと深き松林に入る。これ能代の防風林なり。羽後の海岸は大抵沙濱にして、船を繋ぐべき所甚だ乏しく、男鹿半島より北には、能代唯一つあるのみなり。この地とても能代川の口にして、良き港にはあらぬが上に、昔は風すさまじく烈しうして、水の上はいふに及ばず、陸の住居さへ安からざりき。妨ぐるものなき日本海を渡り來る風の、直にこゝに衝き當ることなれば、その勢の猛きこと、





譬ふる

賀藤清右衛門景林



能代の防風林

譬ふるに物もなきほどにして、礫を飛し、砂を捲き、天を晦うし、地を撼かし、行客を倒し、民家を埋むること、秋冬は一箇月に二度、三度のみならずりしなり。

然るに秋田の木山方吟味役賀藤清右衛門といふものこれを憂ひ、海濱

栽る。

栽うる

さしも  
さまで

榮

梢

文政元年は二四  
七八年

一帯數百町歩に松を栽ゑて、土沙の飛散を防ぎ止めんことを思ひ立ち、十一年の長き間、松苗を栽うることを怠らざりしかば、終に林を成すに至れり。これとりさしも強き風のさまで暴れ立たずなりて、能代の町の民家も沙に埋めらるゝことなく、道行く人馬も心安く過ぐることを得、従うて土地の榮を増すに及びたりといふ。

これ遠からぬ文政年間のことにて、眼の前なる林がそれぞと思へば、沙の白きを踏むにつけ、梢の翠なるを見るにつけて、その人を懐ひ、その功を高しとする



をかしう。  
長閑  
唱ふ。

情に堪へず。落葉搔く賤の兒等が鄙びたる節をかし  
う長閑に唱ふ聲を聞きつゝ、鞍の上にて、吾は獨り人  
の力の大きいなることを思へり。

(幸田露伴)

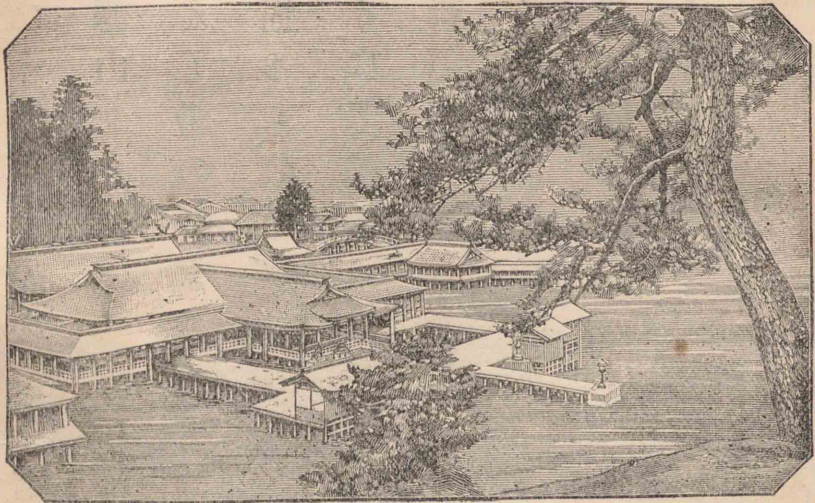
二七 瀬戸内海

惜しかり

前略。下關發船の際は御見送被下奉謝候。名残は惜し  
りしが、船は一人の爲に止らず、帽子ふる君が姿の  
豆の如く、干珠、滿珠の島の帽子より小く、やがて部崎  
の燈臺の光ると共に、海も山も一つに暗くなりたる  
時は、何ともいはず心淋しく、父母の上さへ思ひ出

知己

別天地



島 殿

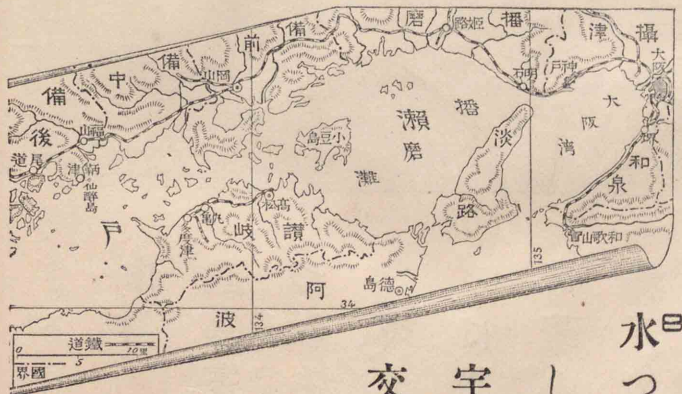
さるれば、急ぎ船室に下り  
申候。

二等室の乗客六十餘人、い  
づれもはや十年の知己の  
如く、くつろぎて話し合へ  
るは、腰掛狭くむつかしげ  
に睨み合ふ汽車の中とは、  
別天地の趣に有之候。小生  
は朝よりいろく騒ぎた  
る爲か、睡氣早くさして、舵



蹴る

ひく鎖の響、船の波を蹴る音もいつしか耳に入らず、  
 徳山々々とボーイの呼び立つるも、大島の瀬戸と見  
 えて船のやゝ  
 揺るも、夢のや  
 うにて、柏手の  
 音の頻に起る  
 に、全く目覺む  
 れば、既に巖島  
 に着きたるに  
 て候。

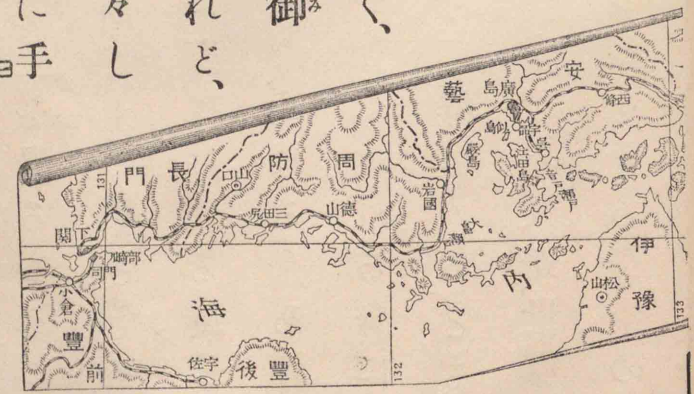


水目つかはぬ顔の恥づか  
 しきばかりに拜し候。  
 宇品にては乗客過半  
 交替し、土地の人と見  
 ゆるが、こゝは似島、  
 かしこは江田島と  
 指さして、問ひもせ  
 ぬ事まで語り聞目

柏手

記憶

巖島は君が曾て  
 遊びし處と記憶  
 致候。殿廊波に浮  
 んで龍宮城の如く、  
 燈籠未だ消えず、御  
 山の杉なほ暗けれど、  
 空と海とより神々し  
 く明けゆく景色に手  
 たるものかと、巖島の莊嚴と併せて、入道の氣宇を想  
 ひやり候。



かせたる所自慢  
 も、なか／＼面白  
 く候。名高き音戸  
 の瀬戸吳の南に  
 當り、兩岸檣を壓  
 して、棹さゝばと  
 どかんとす。これ  
 が清盛の開鑿し

莊嚴  
 氣宇  
 平清盛入道靜海



巖  
磯馴松  
蔽はれ

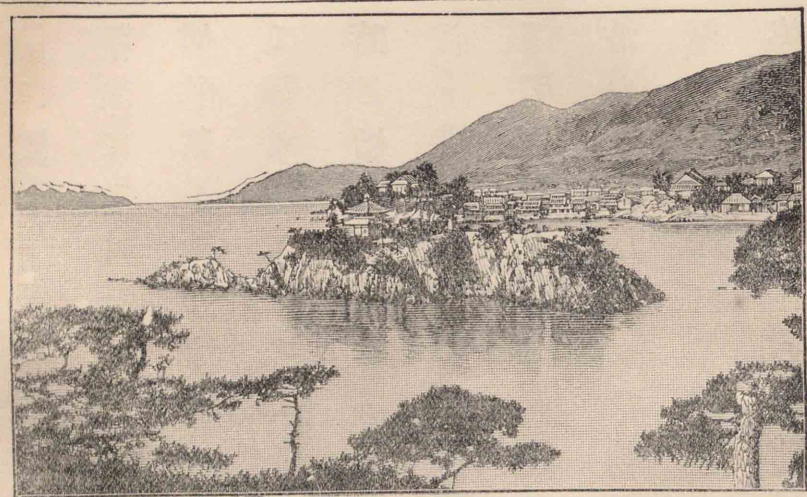
何處

これより尾道を過ぎて、鞆津に入り候まで、船はいくつともなき大島小島を、迎へては送り、送りては迎へ、東へくくと青疊の上を滑るやうに進み候。暖なる日は一杯に輝きて、島は土の赭きもあり、巖の黒きもあり。されど磯馴松に蔽はれたるは皆一樣にて、その間には往きかふ舟あり、泊れる舟あり、往きかふ舟の帆は水鳥の浮べるが如く、泊れる舟には釣を垂れたるもあり。何處を限りて梓に入るとも、一幅の畫を成すべく候。これまでヨーロッパ人が、世界の絶勝といふは、スウイスよりライン河を下る舟中の景色なりといひ

遠し

遊學

眺むる



鞆

津

しが、この頃は日本の瀬戸内海を無雙の佳景なれと唱へて、萬里を遠しとせず、わざとこれを觀に来る者もある由に承り候。かやうなる景色を今遊學の序に眺むること、如何なる幸ぞと思ひ、従つて船ぎらひなりし小生に、たつて海路を勧めし君に謝する次



好標本

第に候。

鞆津にては、瀬戸内海の風景の好標本ともいふべき  
 仙醉島を飽かず眺め候が、こゝを出でて針路の東南  
 に轉ずると同時に、日もまた傾き、多度津に入りたる  
 時は、燈火ある方を港と纔に知り候のみ、月は出でず、  
 たゞ満天の星を仰ぎ、舷側の波の怪しく光るを眺め  
 て、甲板に立ち盡し候。高松は宵の中に過ぎ、播磨灘の  
 波たゞぬは却つて物足らず、淡路島は寐て見ず。海上  
 極めて平穩に、午前三時神戸の埠頭に着船致候。直に  
 停車場に駈けつけ候が、一番汽車にはまだ間のある

仰ぎ

埠頭

走書

を幸に、手帳をちぎりて走書致候。勿々。

二八 戦友の同情

上等兵鹿野慶五郎は宮城縣の人なり。明治三十七年  
 十月十三日、朝仙嶺の苦戦に、一等卒小野寅吉の重傷  
 を負へるを見て、これを收容せんとせしに、小野は否  
 否と手を振り、余の傷は重し、收容せらるるとも、とても  
 ながらふべくもあらず。余の爲に、君をも負傷せしめ  
 てはならず、早く余を棄てて本隊に合せよ。と辭む。然  
 れども同情の念篤き鹿野は、いかでか出征以來分隊

朝仙嶺は遼陽の  
東北

負へる  
收容

ながらふ。

辭む



雨注

を同じうし、苦樂を共にせる戦友を棄て去るべき。強ひて小野を背負ひ、彈丸雨注の間をくゞりて、谷間を下ること約五六百米突、こゝに聊か安全なる地を得て、暫く息ひ居たり。

危険  
友誼  
感激

時に兵士數人疾走して降り來り、彼等の前を過ぐるや、一人は即死し、二人は負傷せり。これを見たる小野は、この危険なる境にありて、己を忘れて、戦友を救はんとする鹿野の友誼に感激し、その背より滑り落ちて、涙を流して曰く、駈足にて通過してもかくの如くなるに、吾を負うて行かば、無事に歸り着かんこと覺

憾

擔架  
託し

束なし。余は何處に死すとも憾なし。君早く去れ、決して余を顧みることなかれ。とて動かず。されど鹿野は「この急に當りて、余何ぞ獨り去るに忍びんや。死生は命なり、唯君と共に行かん。」とて、遮る小野を再び背負ひ、無事に難所を過ぎて、遂に小野を擔架に託し、己は本隊に歸れりとぞ。

(忠勇美譚)

二九 肉彈

明治三十七年七月二十七日

午後五時は來た。我が全砲兵は一齊に砲火を開き、歩兵も亦全力を舉げて射撃を始めた。天地は忽ち硝煙



玉の緒  
絶える

鼓舞

肉薄

攀ち登る

の雲霧に鎖された。飛彈爆鳴は山谷を劈かうとするばかりであつた。我が歩兵は射ては進み、止つては撃ち、奮進又躍進、小隊長殿と微に響くは最後の感謝であつと叫ぶは玉の緒の絶える聲。只進め、進んで死せよと、將校は軍刀を揮つて、戦線を彼方に走り、此方に驅けて、士氣を鼓舞してゐた。豫備隊であつた二個小隊も、工兵も、亦第一線に増遣された。遂に我が第一大隊は、敵前實に二十米突の近くまで肉薄したが、前に立ち塞がつてあるのは、屏風のやうな岩山で、殆ど一つの足場もなければ、如何にあせつても攀ち登るこ

仆れる

派遣  
僵れ

とが出来ず、側面からは敵彈をバラ／＼浴びせかけられる。正面に向つた第二中隊は、只々敵の機關砲の標的となるばかりで、見る／＼バタ／＼と仆れる。而して又我が軍の榴霰彈は、花火のやうに空中に破裂しただけで、敵の防禦工事に對しては、殆ど何一つ效力を奏しなかつたやうである。榴霰彈では役に立たぬ、早く榴彈を發射してくれと、砲兵隊に頻に傳令使を派遣したが、一人として歸つて來ず、皆途中で僵れた。工兵の小隊長に爆藥を送つて來いと命じたが、それも間に合はなかつた。



をり

餘韻

一しほ

七時も過ぎ、八時、九時ともなつたが、形勢は依然として  
 渉らぬ。夜は已に更けた、物凄いな下弦の月は、淡く戦  
 場を照して、陣地の半面をいと朧に露して居た。をり  
 もをり、遂に左翼の方に當つて、唳々たる「君が代」の吹  
 奏が聞えた。月影の細い空を傳ひ、餘韻が微に長く延  
 いて、予らの腦裏に一しほ深く沁み渡つた。「君が代」の  
 喇叭の聲は、恰も「陛下御親ら前へ」と號令されるが  
 如くに感ぜられて、將卒は皆自然に身をひきしめ、勇  
 氣更に百倍し、忽ち奮躍、彈雨を犯し、岩石を攀ぢて猛  
 進し、大喊聲を放ちつゝ、敵壘に突入した。眞黒に固ま

歩兵少佐松村安雄

つた一團の先頭に立つた松村少佐は、怒眼叱聲、突き  
 込め、突き込め。」

格闘、(品格)

慘

苦楚

「君が代」の吹奏はなほ盛に起る。各隊は續いて、萬歳、萬  
 歳の聲に天地を轟かして聲援を與へた。山上には劔  
 尖相摩して火花を散し、接戦格闘、これが大和男兒の  
 最後の肉弾だぞ、傲慢無禮のこの仇、今知れ。」と打ち込  
 む太刀筋に、鮮血の河を流し、伏屍の山を築き、慘は慘  
 だが、艱難苦楚、やつと敵を打ち破つた我らの愉快は  
 如何ばかりであつたらう。海嘯のやうな一團の後ろ  
 からは又一團と我は續々兵力を増加し、敵は遂にこ



逡巡

の猛烈な攻撃に耐へられず、なほ暫くは逡巡しながら接戦格闘を續けたが、我は益勇を鼓して奮闘した。時は七月二十八日午前八時、東天に紅を染め出した頃、我が軍は確實に太白山一帯の高地を占領した。軍旗はひらくくと陣頭に翻り、萬歳の聲は潮のやうに湧いた。

(内陣による)

三〇 薩摩あらし

九月二十三日は、城山陥落の前日なり。この夜薩軍の主將西郷隆盛、諸將を營中に會して、訣別の宴を開き

明治十年のこと  
城山は鹿兒島市の  
背後にあり

酣

怡然

たるに、酒酣に興湧きて、與丁益森三四郎馬方節を謠ひ、馬方踊を演ぜしかば、満座笑ひとよめき、勇將猛卒いづれも怡然として、復死生の事を知らざるもの如く、夜更くるまで歡を盡しぬ。

亂入するや。

桐野利秋  
村田新八  
池上四郎

斃る

二十四日拂曉、官軍の城山に亂入するや、西郷、桐野、村田、池上、別府等を始として、四十餘名の將士等、岩崎谷に向へるに、小倉壯九郎、勢の已に迫れるを見、慨然劍に伏して自刃せり。桐野之を見て、何ぞ性急なる。といひつゝ、愈進めば、銃丸の飛びくること愈急に、桂四郎忽ち流丸に中りて斃る。彈雨啾々、薩將の斃るゝもの



勢

又、復

復、又

傷つく

相踵ぐ、別府晋介、逸見十郎太、西郷の左右にありしが、勢の急なるを見て、逸見、西郷に謂つて曰く、「最早これまでなり」と。西郷曰く、「未だし、本道に進み出で、潔く戦死せん」と。又行くこと一丁餘、四面より集注せる銃丸は驟雨の如し。逸見復西郷に迫れるに、西郷「未だし、未だし。」と言ひつゝ、遂に進みて島津應吉邸の門前に至る。飛彈忽ち西郷の股部と腹部とを傷つく。西郷別府を顧みて、「晋殿々々、今は早これまでなり、進む能はず」と。言辭從容、平生に異ならず。この時西郷傷重くして起つこと能はず、徐に跪坐し、儼然襟を正しうして、雙

衷情、(衷、衷)

輿、輿、(輿)

手を合せて遙に東天を拜せり。これ實に禁闕に向つて一片の衷情を表し奉れるものと知られたり。  
この日別府は負傷中なりしかば、從卒小杉恆右衛門、豊富金右衛門をして輿を擔はしめて西郷に従ひたるが、今その言を聞いて、さらばとて輿を下りて西郷に向ひ、「御免あれかし」と言ひて、その首を斬り、西郷の從僕吉左衛門をして竊に持ち行きて、折田正助の門前に埋めしめ、己は尙も進みて岩崎口の堡壘に達し、叫びて曰く、「先生は既に死せり、先生と死を共にせんとする者は、潔く死を決せよ」と。竟に奮戦して敵彈雨



遠色

注の中に陣歿せり。  
 桐野は戦敗れたれども更に屈せず、岩崎口に達するや、自ら銃を執りて前面の敵を狙撃し、一發ごとに「命中せり」と言ひつゝ、さも心地よげに左右を顧み、終始自若として毫も遠色なし。時に左側の官軍壘上に來り迫り、銃劍を以て刺さんとするや、桐野刀を以てこれを拂ひ、更に前面の官軍を狙撃して止まざりしが、俄然銃丸その右額に中り、鮮血迸り出でて見ることを得ず。されど少しも意とせず、尙も勇を振つて壘上の敵を突き倒さんとせしが、力竭きて遂に斃れぬ。

蒙り

この時官軍四方より一時に打ち寄せて、この一小壘をとり圍み、銃口を攢め、劇しく一齊射撃を續けしかば、村田、池上、逸見等皆數創を蒙り、衆寡終に敵せず、同一凹壘の中に斃れたり。  
 戦闘は午前四時を以て始り、同じき九時に終り、程もなく猛雨一陣、盆を覆す如く降り注ぎて、城山の鮮血を洗ひ去りたりき。

(西南記傳による)

三一 いくさ物語

徳川秀康は家康の次子にして、越前に封ぜられ、力め



鎧名譽

て武功の士を集めけり。その臣<sup>ま</sup>伯伊勢といふもの、ある時、嫡子の鎧の着初に、同輩阿<sup>あ</sup>閉<sup>ひ</sup>掃部といへる名譽の士を請待して、鎧着ることを頼みけり。さて儀式すみ、宴に移れるとき、伊勢掃部に向ひて、めでたき折なれば、御身が武功の物語して、愚息に御聞かせ候へ。といへば、掃部「いや、某には御話申すべき程のこともなければ、御望も辭みがたく候へば、嘗て出會ひし士の事を聞かせ申すべし。」とて、次の如く語り出でけり。

江州賤<sup>が</sup>嶽の合戦に、日も傾きたる頃、某一騎余吾の

人體

雜兵 槍

湖のあたりを過ぎ候ひしに、しきりに後より呼びかくるものあり。某馬ひき返し候へば、そのもの申すやう、今朝より駈けまはれども、未だよき敵に逢はず。今御人體を見うけ候ふこそ幸なれ、いざ御相手。」とて進み寄る。それこそこなたも望む所。」とて、互に馬より下りて立向へば、しばらく御待あれ。今朝より雜兵多く突き崩して、槍のよごれて候ふに。とて、その穂先を湖水につき込みて、さらくくとくゞらすること二三返。」さらば。」とて突き合ひしが、久しく勝負もつかず、いつしか日も暮れ果てて、物



あやめ

のあやめもわかずなりぬ。

名残

その時、かなたより聲をかけて、もはや槍先も見えず候ふ。名残惜しけれど、御暇申すべし。さるにても御名こそ承りたく候へ。某は青木新兵衛と申す。とて、某の名をも聞きて、さて後日もし陣頭に出會ひ候はば、互に人手にはかゝるまじく候ふ。もしまた御方となり候はば、睦しく交り申すべし。さらば。といひて、立別れぬ。

某これまで幾度となく戰場に出でたれど、かほど見事なる士は、見しこと候はず。いかゝ成り果てた

るか、と、忘れがたく覚え候ふ。

にじり

その頃、伊勢の許に心安く出入する浪士に、青木方齋といふものあり。この日も來りて勝手に居りしが、この話を聞きて、にじり出で、さても只今の物語を承りて、今更昔を思ひ出で、涙を落して候ふ。その時の御相手は、恥づかしながら某にて候ひき。かく申すばかりにては、うきたる事におぼさるべし。とて、なほその時の様、雙方の鎧の緘しやう、馬の毛色など、くはしく語り出でけり。掃部驚きて、さてく思ひよらざる對面かな。年來の本望今こそ達して候へ。とて、腰の脇差を

緘しやう  
くはしく

本望  
脇差



とりて方齋に贈りけり。これより方齋の名高くなりて、秀康の耳にも入り、掃部と同じき祿高にて召し出されけりとぞ。

(駿臺雑話による)

### 三二 鋼鐵王

ピッツブルグは米國ペンシルバニヤ州の都會にして、最良の石炭と鐵材とに富む。ホームステッドはこの都會を距ること一里餘、大河に沿ひたる所にあり。その地にある鐵工場は、面積わが二十餘町歩に互り、その使役せる職工の數は、數千人の多きに達すといふ。鐵

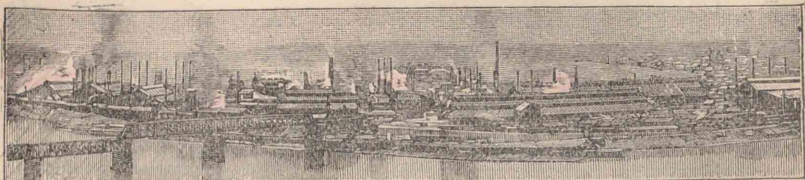
互、渡



収益

トラスト

この文は明治廿九年に成れり



ホーラムの鐵工場

液は混々として大爐より流れ出で、赤色の鐵塊は機械によりて自在に延長せられ、爆聲轟々として近く雷鳴を聞くに似たり。その資本金は約七億圓にして、一年の収益數千萬圓に上る。この鐵工場は初め有名なるカーネギーの經營に成り、後モルガンこれを他の工場と合せて、一大トラストを組織するに至れり。初め米國鋼鐵の産額は、英國に比して僅に三分の一に過ぎざりき。然るに最近の



統計  
霄壤の差

統計に據れば、一年一千萬噸以上に達し、わが邦の産額數萬噸に比すれば、殆ど霄壤の差あり。ホームステットの鐵工場のもにても、予が視察の當時、尙一年に百八十萬噸を製すといへり。

今や。

カーネギーは今や七十有餘の高齡に達し、四億圓の財産を有すといふ。若し假に八十歳まで生存すべしとなし、終日終夜寝ぬることなく、一分毎に五磅即ちわが五十圓の金を費すとも、猶死に至るまでには、その資産を盡すこと能はずといふ。然るに彼は子孫の爲に多くの資産を遺すは、却つて之を誤る所以なり

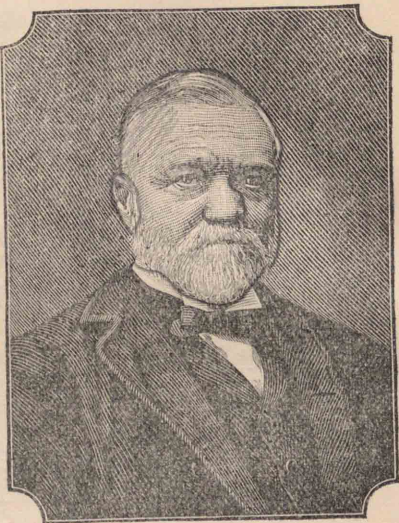
遺産

制限

活用

宣言

當りてや。



カーネギー

とし、かれらに與ふべき遺産を制限せり。又常にいへらく、偉大の士に鉅億の富をもたしめば、必ず社會の爲に之を活用せん。これ社會の幸福なり」と。

カーネギーは自らこの宣言を實行せり。その米國を去るに當りてや、紐育に六十五箇所の圖書館を建築せんが爲に、一千萬圓を寄贈せり。ピッツブルグに於ても廣大なる圖書館を建て、又世界第一の工業大學を



歸るや。

知名

設計

非凡

理想

秘訣

設立せんが爲に、五千萬圓の大金を投じたり。その郷里なる蘇格蘭に歸るや、亦圖書館及び工業大學の設立に對して、殆ど同額なる寄贈をなし、知名の政治家を評議員として、その設計に従事せり。それ善く富を集め、又善く之を散ずる者は、世に甚だ鮮し、カーネギーの如きは、實にかゝる人物の中の非凡なる者なり。その著「富の福音」を讀む時は、何人も必ずその理想の大いなることを知るべし。

かくの如く世界第一の富豪となりたるカーネギーは、抑誰の子にして、如何なる秘訣を有して、こゝに至

詩聖

神聖

渡、互

南北戦役は今よりおよそ五十年前に起りし米國の内亂

りしか。彼は蘇格蘭のある機織の子にして、家固より貧しかりき。彼が今日の地位に到れるは、その母が教導の功最も大なりきと、傳へらる。母は常に蘇國の詩聖バーンズが、勤勞を好み、清貧を樂しむことの最も神聖なる由を詠みし歌を教へて、その兒に大いなる感化を與へたり。

カーネギーはこの慈愛なる母と共に米國に渡りて、汽罐の火夫となり、轉じてピッツバルグの電信局に入りて、脚夫となれり。南北戦役の際、通信事務に就いて功ありて、事務長に擧げらる。後鐵道會社に入り、鐵橋



文明を支配す

零落

祖國

始末

請負業の有利なるを知りて、會社を辭して之に従事せり。遂に彼は鋼鐵が世界の文明を支配すべきを看破して、この最も有望なる事業に、その一身を委ぬるに至れり。かくして成功の後、往時零落して、母と共に郷里を出でたる事を追懷し、母子が祖國に負ひたる恩を謝せんが爲に、この始末を敘して一千萬圓をグラスゴー市の圖書館に寄贈せり。この母を思ふ情、故郷を愛する心、兩つながら人を感動せしむ。(井上友二)

三三三 信用

處世

簡易  
複雜

敏活  
迂遠

繁文縟禮

浪費

社會ハ多人數ノ共同生活ナリ、共同生活ヲ營ムモノハ、欺クベカラズ、疑フベカラズ、一人欺ケバ萬人疑フ。信用ハ處世ノ要件ナリ、詐欺一タビ社會ニ生ゼバ、一切ノ事務ハ、コレニ對スル用心ト防禦トヲ備ヘザルベカラズ。コレガ爲ニ簡易ナルベキモ複雑トナリ、敏活ナルベキモ迂遠トナリ、手數ヲ要スル割ニ效果ハ舉ラズ、繁文縟禮トハコノコトナリ。一品ヲ預ルニモ受取ヲ認メザルベカラズ、一枚ノ證書ニモ印章ヲ捺サザルベカラズ。金錢ト時間トヲ浪費スルコト幾何ゾヤ。一言信ズベクンバ、何ノ爲ニカコノ煩ヲナサン。』



嘗、嘗

西洋諸國ニテハ、信用ヲ重ンズルコト甚ダ厚ク、從ウテ事務ヲ取扱フコト、簡易ニシテ敏活ナリ。邦人某嘗テどいつニ遊ビ、懷中時計ヲ修繕セシメントテ、或時計師ノ許ニ到レリ。時計師コレヲ受取リテ、某日某時重ネテ來ラレヨ。トイフノミ。某預リ證ヲ求ム。時計師怪シミ且不快ノ色ヲナシテ曰ク、吾久シクコ、ニ店ヲ構フレドモ、未ダ曾テカ、ル求ニ遇ヒタルコトナシト、邦人愧ヂテ歸レリ。又或人嘗テ英國ヲ旅行セシ時、某驛ニろんどん行ノ貨物ヲ託シ、預リ證ヲ請ヘバ、驛吏安全ニ届ケダニセバヨカラズヤ。トイフ。返ス辭

不快

嘗、嘗

宛名  
配達

モノナク、ソノ儘旅行ヲ續ケテ、ろんどんニ着キシガ、貨物ハ來リ居ラズ。サテコソト思ヒ、急ギ驛ニ至リテ尋ヌレバ、ソレハ宛名ノ家ニ配達シタルニ相違ナシトテ、驛吏一人ワザ／＼來リテ、ソノ家ノ倉庫ヲ搜シタルニ、果シテ在リ。遙ニ奥ノ方ニ納メタレバ、前ニハ氣付カザリシナリトイフ。

欺カザルモノハマタ疑ハズ。ワガ法官某嘗テ公用ニテふらんすヨリべるぎ―ヲ巡回シ、或驛ニ下車シテ、荷物ヲ受取ラントシタルニ、途中ニテ失ヘルナラン、合札ナシ。如何セント案ジタリシニ、驛吏ハソノ姓名



即刻

ト身分トテ尋ネテ、即刻荷物ヲ渡シクレヌ。ソノ手續ノ簡便ナルニハ、ソノ人深く感じタリ。

漫遊

支那人モ亦商業上ノ信用ヲ重ンズ。嘗テ歐洲ヲ漫遊セル人、歸朝ノ際、香港ニ上陸シ、フト支那人ノ店ニ籐製ノ椅子ヲ賣レルヲ見タリ。ソノ中ニ見事ナル細工ノ物アリ、價ヲ問フニ一弗ナリ。買ヒタクハ思ヘドモ、旅費已ニ盡キントシテ、殘ル所幾何モナシ。五十仙ニ負ケズヤ。トイヘバ、商人ハ、品物ニ懸直ナシ、モシ直ニ拂フコト能ハズバ、歸國ノ後送金アリテモ差支ナシ。トイヒテ、一面識モナキ他國人ニ對シテ、少シモ疑フ

面識

色ナカリキ。カクノ如クニシテ、始メテ事務ノ簡易ト敏活トテ期スベキナリ。

三四 明治天皇御製

ますらをに旗手授けて思ふかな、

日の本の名を輝かすべく、

國といふ國の鑑となるばかり、

みがけ丈夫、やまとだましひ。

五十鈴川、清き流の末くみて、

こゝろを洗へ、秋津島人。



國民の力のかぎりつくすこそ、  
わが日の本のかためなりけれ。  
國のためいよくつくせ、千萬の  
民のこゝろを一つにはして。  
花になり實になる見れば、草も木も  
なべて務のある世なりけり。  
まきばしら立てし心を動かすな、  
世には嵐の吹きすさぶとも。  
さしのぼる朝日の如くさわやかに、  
もたまほしきは心なりけり。

人はたゞ誠の道を守らなむ、  
高き賤しきまなはありとも。









山本  
正房

*Handwritten text, possibly a signature or date, in cursive script.*